遊び・遊び場調査報告書

2008 年5月

まえばるの遊び場ったい！

はじめに

いま、子どもたちを取り巻く社会環境の変化により、子どもの生活の中心であり成長に欠かせない要素のひとつである「遊び」が、危機的状況にあるとの指摘を耳にします。地域社会の崩壊、マスメディアの浸透による情報の氾濫、「３つの間（空間、時間、仲間）」の喪失、安全管理問題などが、その原因であるといわれています。しかし、子どもは本来、自然環境をはじめさまざまな人や事象と関わり、遊び込むことを通じて“生きる力”を身につけていくものです。国土交通省も公園の遊具設置に関する前提として、“子どもの遊びの重要性”として次のように述べています。

> **子どもは、遊びを通して自らの限界に挑戦し、身体的、精神的、社会的な面などが成長するものであり、また、集団の遊びの中での自分の役割を確認するなどのほか、遊びを通して、自らの創造性や主体性を向上させてゆくものと考えられる。**
>
> **このように、遊びは、すべての子どもの成長にとって必要不可欠なものである。**
>
> **「都市公園における遊具の安全性に関する指針」**
>
> **平成 14 年 3 月　国土交通省より**

前原市は、豊かな自然環境に恵まれているまちです。その環境の中で、現在の前原市の子どもたちに対して、国土交通省が提唱するような遊び・遊び場は提供されているのでしょうか。

こういった問題意識のもと、このたび、前原市における子どもたちの遊びの現状を明らかにすることを目的に、「遊び・遊び場アンケート調査」および「遊び・遊び場実態調査」を実施し、報告書としてまとめました。

もくじ

はじめに　1

調査の目的と概要　4

１章　子どもはどこで遊んでいるのか　6

1　遊ぶ「場所」の変化　6
2　地図から読みとれる「遊び場」　8
3　子どもの自由記述から読みとれる「遊び場」　10
１章のまとめ　16

２章　「遊び場」が変化している原因はどこにあるのか　１７

1　「時間」　18
(1) ならいごと
(2) メディア
2　「仲間」　20
(1) 遊ぶ人数
(2) 遊ぶ相手
3　「空間」　22
(1) 遊ぶ場所
(2) 公園
4　遊びの内容　26
(1) 外での遊び
(2) 部屋での遊び
(3) 遊びの多様性
5　保護者の意識　30
(1) 保護者が禁止している場所
(2) 保護者の満足度
(3) 満足度が低い理由
２章のまとめ　34

３章　どのような「遊び場」が求められているのか　３５

1　子どもがしたい遊び　36
2　保護者のさせたい遊び　38
3　保護者のさせたくない遊び　40
4　子どもが遊び場を選ぶ理由　41
３章のまとめ　42

４章　全国・県内の調査との比較　４３

1　遊ぶ場所　43
2　遊ぶ人数　45
3　遊びの内容　47
4　時間　48
４章のまとめ　49

５章　遊び場紹介　５０

1　身近な遊び場　50
2　運動公園・広場　51
3　やりたいことができる遊び場 ―プレーパーク（冒険遊び場）―　52

まとめ　５７

提言　６０

未来の前原の遊び環境　６２

おわりに　６３

参考資料　６５

調査の目的と概要

●調査の目的

前原市における、子どもの「遊び」と「遊び場」の状況を明らかにし、子どもの豊かな遊び環境に向けた提言を行うことです。

●調査の概要

（1）実態調査の実施

ア　調査方法　　公園、その他の「遊び場」に市民の調査協力員がおもむき調査し記録しました。

①遊び場の状況を見て記録

（利用人数、何をしているか、看板、日陰など）

②利用者の声を聞き取り記録

（遊び場を選んだ理由、満足度、希望、他の遊び場など）

イ　実施期間　　夏休み調査　2007 年 7 月 20 日～8 月 31 日

秋調査　　2007 年 10 月 15 日～11 月 30 日

ウ　調査候補地　　前原市内公園 143 ヶ所、行政区にある遊び場 46 ヶ所、その他子どもの遊んでいる場所

エ　調査地点数　　のべ 98 ヶ所　（夏休み調査　76 ヶ所　秋調査　22 ヶ所）

オ　インタビュー回答者数　のべ 103 名（夏休み調査 52 名　　秋調査 51 名）

カ　調査員数　　34 名

（2）アンケート調査の実施

ア　調査方法　　小学校を通じ小学生へアンケート用紙を配布し、各家庭で児童および保護者に記入してもらい、　小学校経由で回収しました。

イ　実施期間　　2007 年 10 月 4 日～19 日

ウ　調査実施校　　前原市内全 9 小学校

エ　対象者数　　児童 4575 名　およびその保護者

オ　回収数および回答者数

回収数　2927 部（回収率 64%）

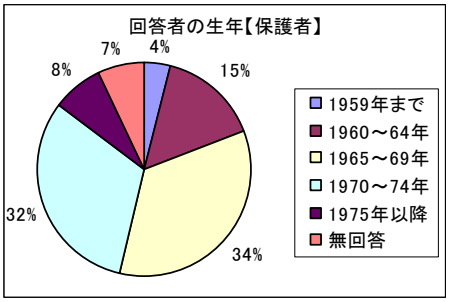
回収数内訳

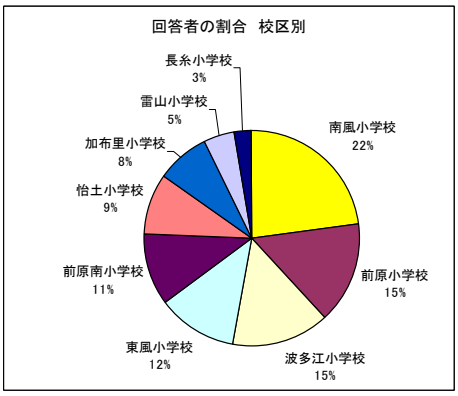
小学校名	児童数（人）	回収数（部）	回収率
前原小学校	694	439	63%
加布里小学校	384	234	61%
波多江小学校	751	436	58%
長糸小学校	117	76	65%
雷山小学校	241	135	56%
怡土小学校	392	270	69%
前原南小学校	566	316	56%
南風小学校	947	671	71%
東風小学校	482	350	73%
合　　計	4574	2927	64%

有効回答数　2923 部

回答者数　5846 人

（内訳　小学生 2923 人（うち男子 1441 人　女子 1482 人）
保護者 2923 人（うち男性 231 人　女性 2474 人
性別無回答 218 人）





カ　調査内容　①子どもの普段の遊びと遊び場
（遊ぶ相手、人数、場所、内容、希望など）
②保護者の子どもの頃の遊びと遊び場
③子どもの生活時間
④保護者の遊び場に対する意識

（３）調査結果の分析

ア　データ化　アンケート調査のすべての回答をボランティア 33 名の協力によりパソコン入力しデータ化しました。

イ　その他の集計　アンケート調査の地図回答および実態調査の結果は手作業で集計しました。

ウ　分析　調査結果を基にして、遊び場に重点をおいて分析しました。

２章　「遊び場」が変化している原因はどこにあるのか

遊びには「３つの間（時間、空間、仲間）」が必要であり、その喪失が遊びの危機の大きな要因といわれていますが、３間の喪失は前原市にも当てはまるのでしょうか。保護者の不安が、子どもの遊び場の幅を狭くするなど、保護者の意識が子どもたちに影響を与えているのでしょうか。

本章では、１章から明らかになった「遊び場」の変化の原因について、(1) 子どもの「時間」、(2) 遊ぶ「仲間」、(3) 遊ぶ「空間＝場所」、(4) 遊びの内容、(5) 保護者の意識の５つの視点から考察します。

ここでいう「遊び場」とは、遊びを目的として与えられた場だけではなく、子どもにとって遊ぶことができる場所、また実際に遊んでいる場所すべてを指します。

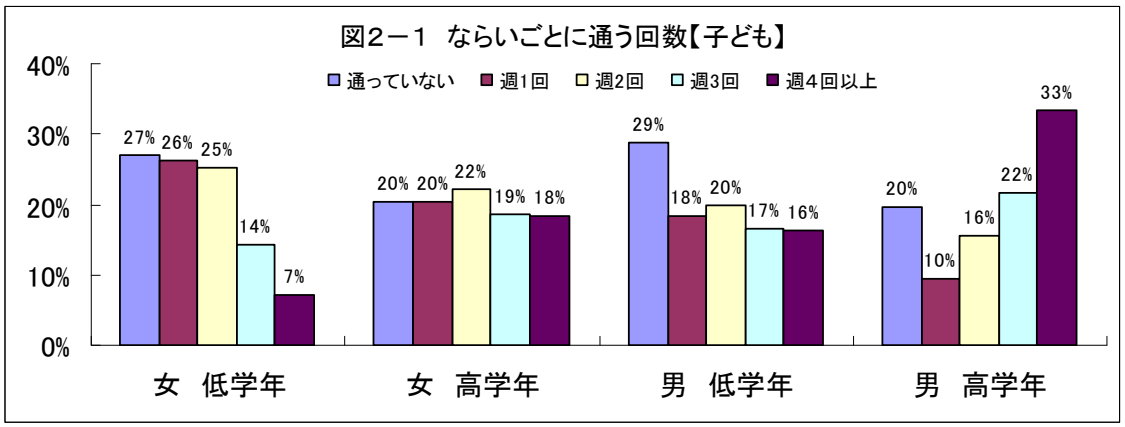
1.「時間」

子どもたちは遊ぶ時間もないほど忙しいのでしょうか。遊び環境を整備した時、肝心の子どもたちに遊ぶ時間があるのでしょうか。保護者からの回答を中心に傾向をさぐります。

（1）ならいごと

ならいごとをしているかどうかの質問では、全体の 76%がしていると答え、男女差はあまりありませんでした。

図２－１は、回答から割り出した、１週間のうちにならいごとに通う日数です。



低学年から高学年になると、ならいごとに使う日数が増えることがわかりました。

ならいごとの内容に関する内容を見ると、男子はスポーツ系が多く 65%、女子は文化系が多く 46%が通っていました。また、学習系では、低学年 22%から高学年 31%へと増加していました。スポーツ系のものと学習系のものは１週間に複数回通う場合が多いために、特に高学年男子は、ならいごとの日数が多いことが考えられます。

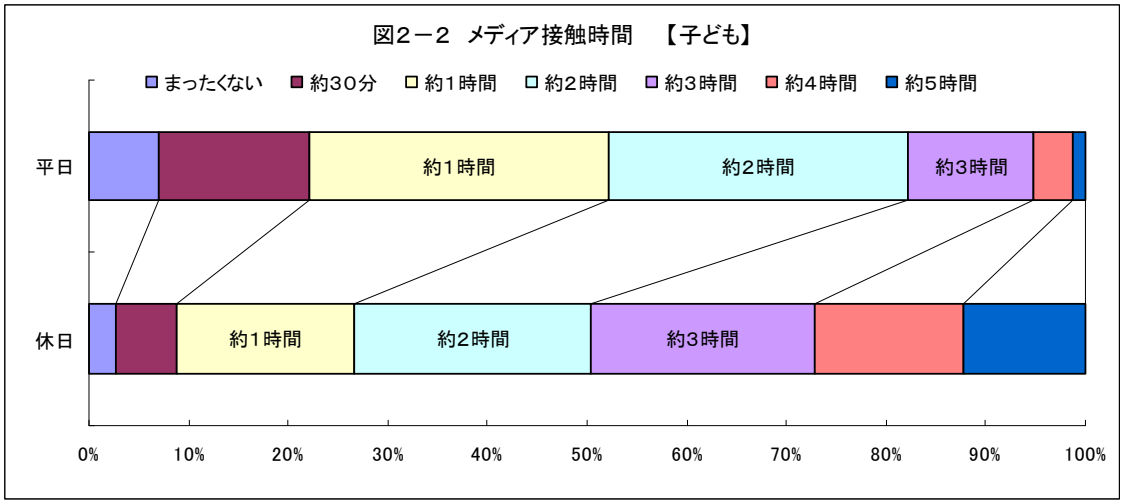
ならいごとが増加すると、子どもの何も予定のない自由な時間は確実に減ることになります。

・ならいごとの増加によって、子どもの「予定のない時間」は減っている
・この傾向は、高学年、とくに男子について顕著である

（２）メディア

子どもの 1 日の生活の中で、現在、大きな割合を占めているのはメディア（テレビ・ビデオ・ゲーム・インターネット・携帯電話など）に接している時間ではないかと推測されます。保護者世代では、特定の時間に見るテレビが主たるメディアだったのではないかと思われますが、現在の前原の子どもの場合は、どうなのでしょうか。

図２－２は、子どもがメディアに接している時間について、保護者回答の結果です。



平日放課後では１～２時間、休日では２～３時間の回答者が多数となっています。また、学年が上がるにつれて長くなる傾向があります。

また外で「携帯ゲーム機や携帯電話のゲームで遊ぶ」と答えた子どもは、全体の 35%、高学年男子では 45%いました。保護者の回答は室内でのメディア接触を答えている可能性があり、実際の時間は図２－２の結果以上に長いことが予想されます。

休日の４～5 時間以上の回答について詳しくみると、とくに女子では低学年の 22%から高学年の 30%へと増加していました。この原因の一つとして、携帯電話所持の低年齢化、パソコンの使用増加、携帯ゲーム機の学習機能増加などの世の中の変化に対し、特に高学年女子においてすばやく反応しているものと考えられます。メディア接触時間は今後さらに長時間化すると思われます。

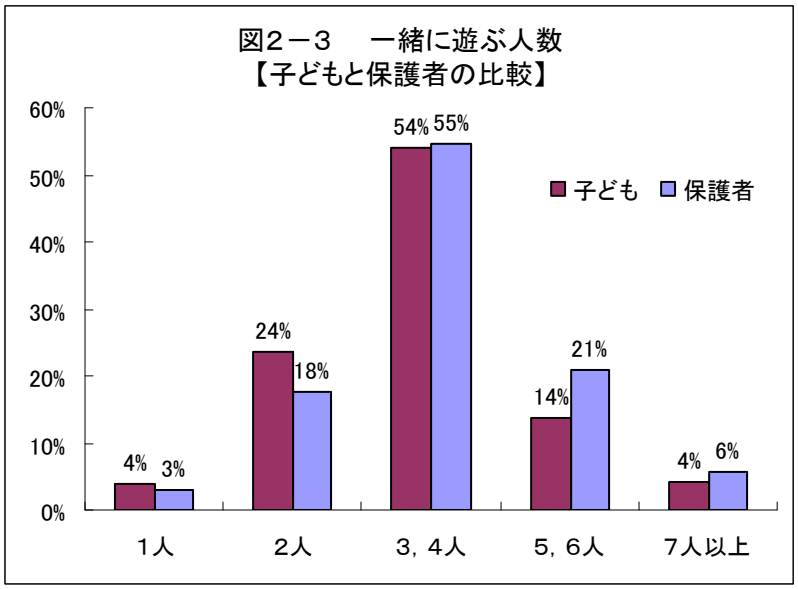
・子どもの「予定のない時間」そのものも、メディアと接することに費やされている

２.「仲間」

（１）遊ぶ人数

子どもたちは普段、何人くらいで遊んでいるのでしょうか。また遊ぶ人数は保護者世代と比較して変化しているのでしょうか。

図２－３は、アンケート調査より、放課後の一緒に遊ぶ人数について、保護者世代との比較を表しています。

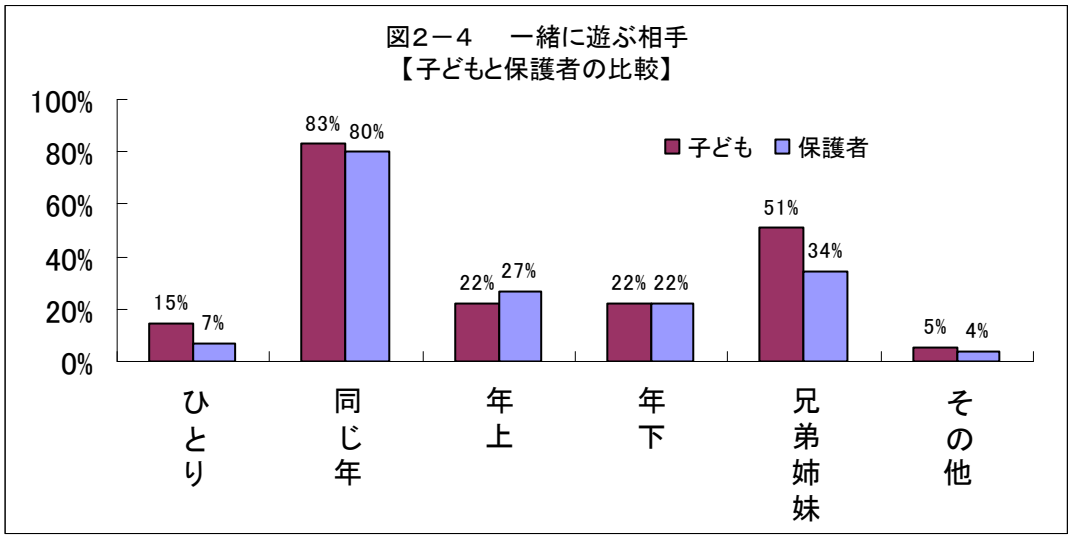


子どもたちが遊んでいる人数は、「３～４人（54%）」が最も多く、次が「２人（24%）」となっています。保護者が子どもの頃を見ると、最も多いのは「３～４人（55%）」ですが、次に多いのは「５～６人（21%）」です。比較すると、今の子どもたちはいっしょに遊ぶ子どもの人数が少なくなっており、保護者の方が大きい集団で遊んでいたことが読みとれます。

・子どもの遊ぶ人数は、保護者世代に比べて減少している

（２）遊ぶ相手

子どもの遊ぶ人数が減少していることに伴い、遊ぶ相手にも変化があるでしょうか。
図２－４では、放課後、子どもが一緒に遊ぶ相手を保護者世代と比較しています。



子どもたちがいっしょに遊ぶ相手で最も多いのは「同じ年」の友だち（83%）で、これは保護者世代（80%）とほぼ同じです。しかし、子どもは保護者世代と比較して、「兄弟姉妹（51%）」の割合が高くなっています。また「ひとり（15%）」の割合は保護者世代（7%）の倍以上になっています。１章「１．遊ぶ場所の変化」でみたように、子どもの遊ぶ場所が家中心になってきているなかで、遊ぶ相手が兄弟姉妹という身近な存在であったり、あるいはひとりで遊ぶという状況が増えてきているようです。

逆に「年上」の友だち（22%）は減少しています。本章「１．（１）ならいごと」で見たように、子どもたちは年齢が上がるにつれて、ならいごとなどの増加に伴い、集まりにくくなっていると考えられます。（参照：図２－１）

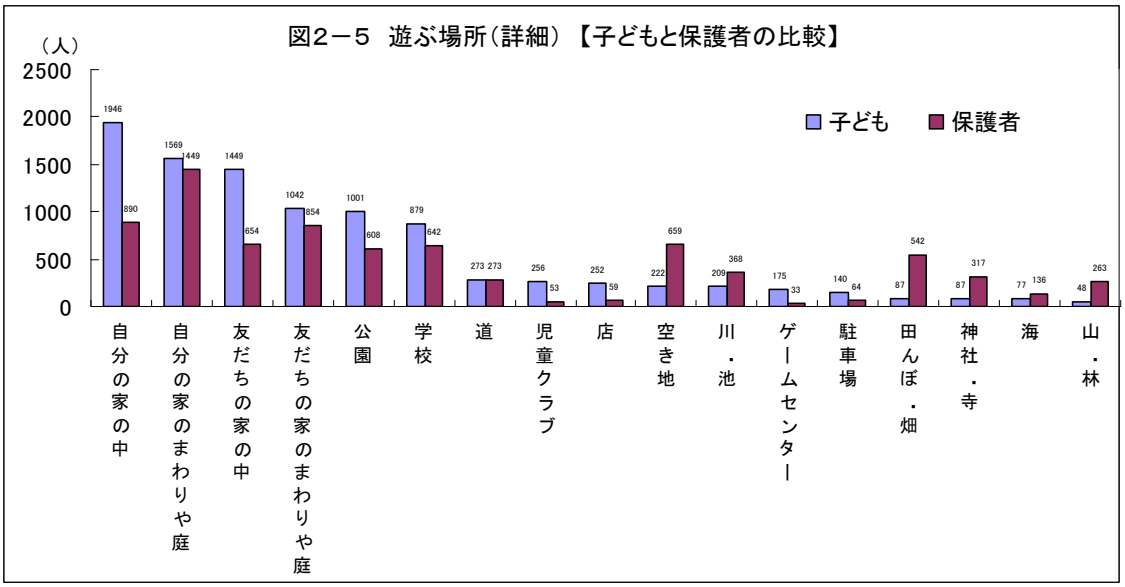
・ひとりで遊ぶ子どもの割合が保護者世代に比べて倍増している
・ならいごとなどによって、子どもたちが集まりにくくなっている

3.「空間」

１章でみたように、子どもたちの遊びの中心は、保護者世代と比較すると室内へと移行してきています。では、遊び空間自体はどのような状況にあるのでしょうか。

（１）遊ぶ場所

図２－５は、前述の図１－２「遊ぶ場所」の詳細について、保護者世代と比較しています。



保護者の回答と比べてとくに減少しているのは、1 章で「自然の中」に分類した「川・池」、「山・林」、「田・畑」、「空き地」と、「神社・寺」です。これらの場所で今も遊んでいる子どもの回答を校区別にみると次のようになりました。

- 田・畑・・・遊んでいるのは、長糸・怡土で５％程度にすぎません。
- 川・池・・・南風・東風・怡土の男子、長糸女子が 10%以上遊んでいます。
  長糸男子と雷山男女では 20%以上が遊んでいます。
- 空き地・・・男子に限って、怡土・加布里・東風・南風・波多江で 10%以上遊んでいます。
- 神社・寺・・・地域と男女別で差はありますが、遊んでいる所が数カ所ありました。

以上のことから、「川・池」、「空き地」、「神社・寺」は、地域によって今も子どもの遊び場となっている所があるものの、「田・畑」については、ほとんど遊び場とはなっていないことがわかりました。

・子どもたちのまわりの自然は、遊び場としてあまり活用されていない

（２）公園

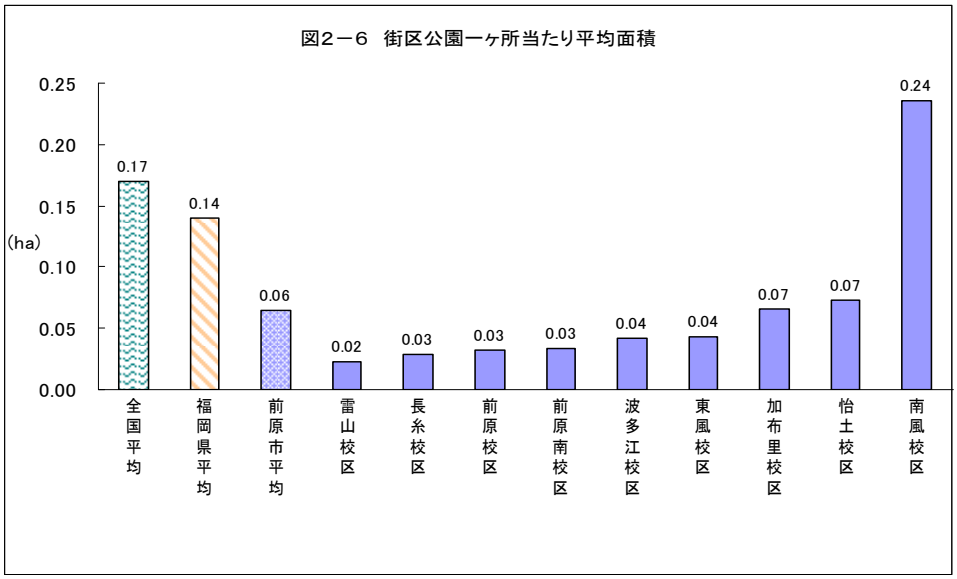
前原市内の公園は、子どもが遊ぶにあたって十分な広さはあるのでしょうか。子どもの求める遊びと公園の状況はマッチしているのでしょうか。アンケート結果と実態調査、前原市とそれ以外の地域の公園の状況からみていきます。

まず公園の面積に関しては、国土交通省と福岡県の資料（※１　P86,P88）から、全国の都市公園整備現況が一人当たり 9.3 ㎡／人、福岡県は 8.1 ㎡／人であるのに対し、前原市では 5.25 ㎡／人となっており、国や県の平均の 60%程度にとどまっていることがわかりました。この数値は、広く公園整備に関して述べられる際に指標とされるものと思われますが、この都市公園面積には、総合公園や運動公園等の大規模公園も含まれています。しかし、前原市にはそのような大規模公園がないため、数値が大変低く出ていると考えられます。

ところで、都市公園には、５種類 12 種別があり（※2　P89）、その中で最も住民に身近なものは街区公園です。国土交通省公園緑地課にて次のように説明されています。

街区公園：もっぱら街区に居住するものの利用に供することを目的とする公園で誘致距離 250mの範囲で１箇所当たり面積 0.25ha を標準として配置する。

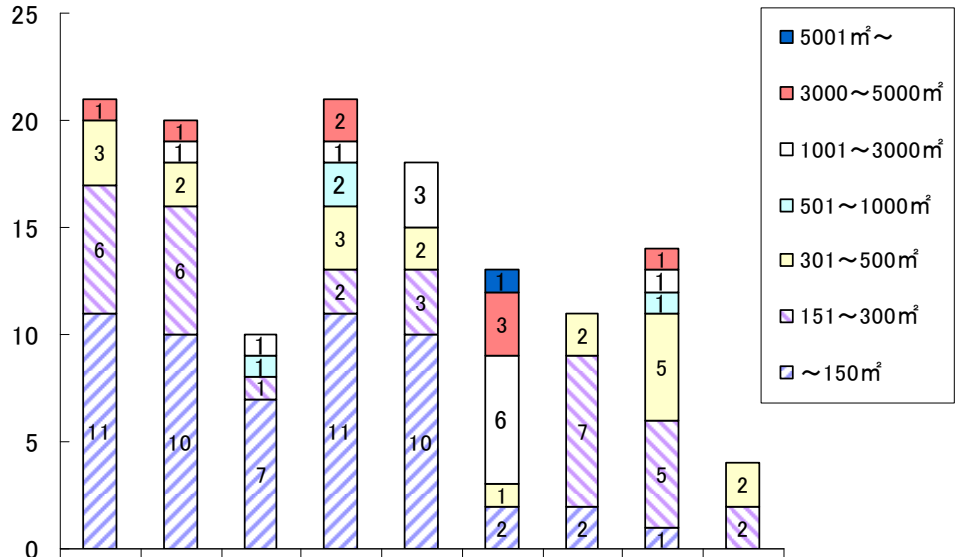
そこで、子どもの身近な公園の広さについて考えるために、前述の国・県の資料(P87,P88)と前原市の公園資料（※３　P90）から、街区公園１ヶ所あたりの平均面積を算出しました。（図２－6）



全国平均は 0.17ha、福岡県平均は 0.14ha で、これは 47 都道府県中 38 位。しかも前原市平均は 0.07ha で県内最下位（P91 参照）でした。さらに校区別の平均面積を算出して比較したのが図２－６です。

また、図２－７は、街区公園の数とその面積を校区別にしめしたものです。

図２－７　街区公園の数【校区別】



	前原	波多江	前原南	加布里	東風	南風	雷山	怡土	長糸
5001㎡～						1			
3000～5000㎡	1	1		2		3		1	
1001～3000㎡		1	1	1	3	6		1	
501～1000㎡			1	2				1	
301～500㎡	3	2		3	2	1	2	5	2
151～300㎡	6	6	1	2	3		7	5	2
～150㎡	11	10	7	11	10	2	2	1	

図２－６，２－７では、5 つの校区において、その校区内の公園の半数以上が全国平均(0.17ha)の 10 分の 1 にも達しない 150 ㎡(0.015ha)以下の広さであることがわかります。

一方、遊び場実態調査では、ほとんど遊ばれていないと報告された公園が 14 ヶ所あり、面積を調べると 150 ㎡以下が 9 ヶ所、300 ㎡以下が 3 ヶ所でした。未調査の公園でも、300 ㎡以下の公園に利用率が低いものが多いのではないかと推測されます。

・前原市には、子どもが遊ぶのに十分な広さがある公園が少ない

※１資料　表 D：国土交通省都市・地域整備局公園緑地課
「都道府県別一人当たり都市公園等整備現況（H19.3.31）」　⇒P86
表 E：国土交通省都市・地域整備局公園緑地課
「都道府県別自然公園及び都市公園（平成 16 年度）」をもとに作成
⇒P87
表 F：福岡県「都市公園整備現況（H18.3.31）」をもとに作成　⇒P88
※２資料　表 G：国土交通省都市・地域整備局公園緑地課 HP より「都市公園の種類」
⇒P89
※３資料　表 H：前原市「都市公園一覧表（H19.10.31）」　⇒P90

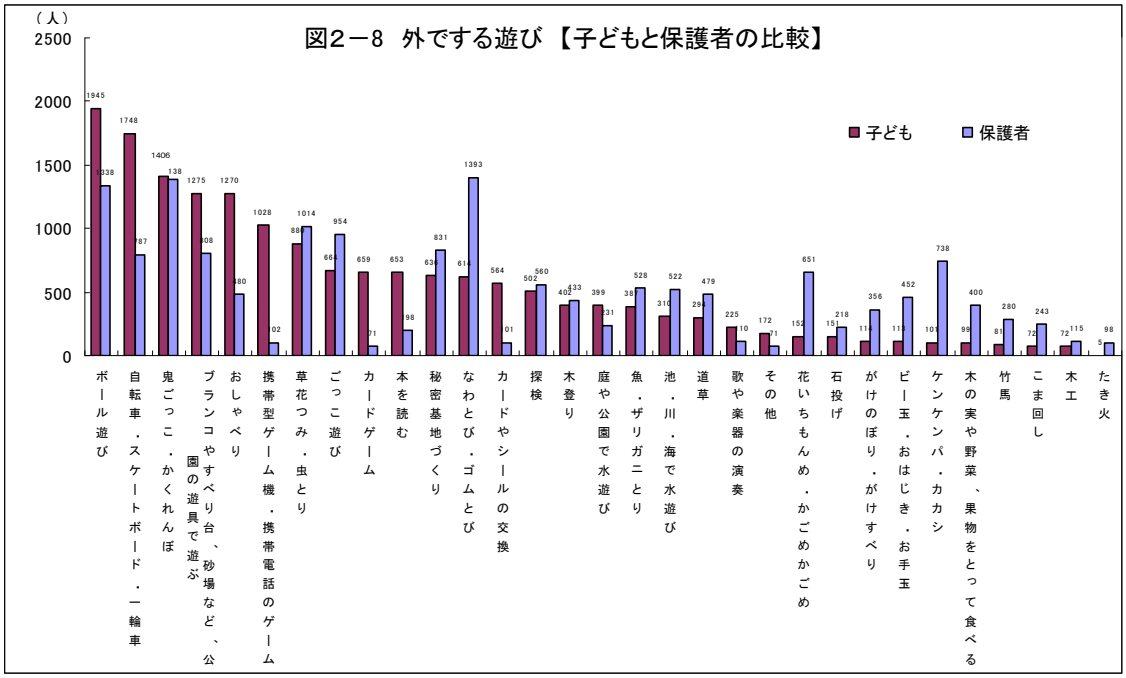
4. 遊びの内容

子どもの遊びの内容は、どのように変化しているでしょうか。アンケート調査の中で挙げた遊びの項目で、子どもが「遊ぶ」と答えた数が多かったものから並べて、保護者世代と比較します。

ただし、回答した保護者の 85%が女性であったため、保護者世代の遊びの内容には、性別による傾向が反映されていると考えられます。

（1） 外での遊び

まず、「外での遊び」の内容を保護者と比較します。



子どもの「外での遊び」では、「ボール遊び」が最も多く、「子どものしてみたいこと（参照：３章１．してみたいこと）」の上位にもボール遊びが入っていることから、子どもにとって、「ボール遊び」が人気のある遊びであることがわかります。

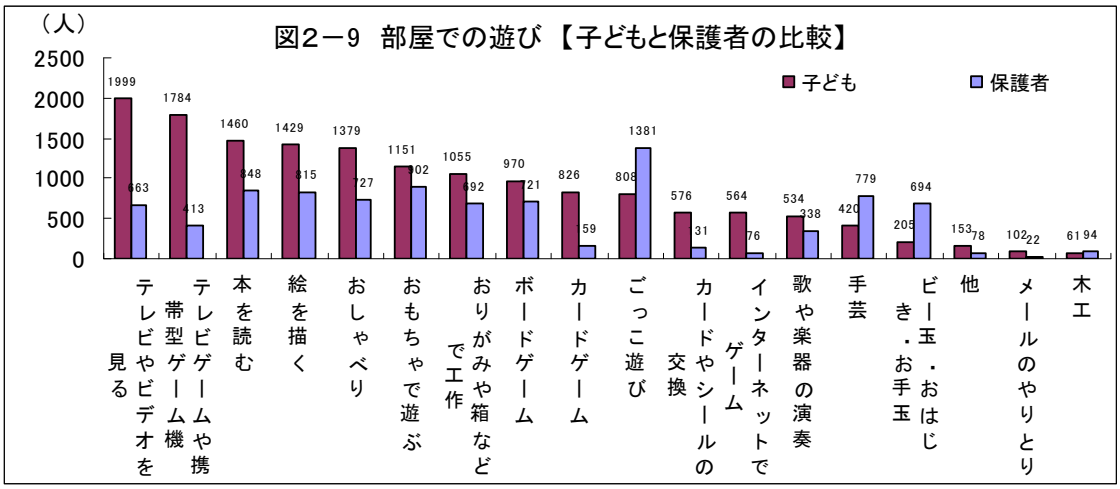
つづいて乗り物を使った遊びが多くなっています。自転車をはじめとする乗り物が、移動手段としてだけでなく、遊びの道具としても欠かせないことが読みとれます。

また外での遊びの上位に「携帯型ゲーム機での遊び」が入ってきており、少人数またはひとりでも遊ぶことができる項目が増えているといえます。保護者では「なわとび・ゴムとび」、「鬼ごっこ・かくれんぼ」といった集団での遊びが多い結果となりました。

子どもたちは既製の遊び道具を使うことが多いのに対し、保護者は道具がいらない遊びや、自然物を利用した遊びが多いことが明らかになりました。一方、「おしゃべり」は、子どもの方が保護者の３倍ほど増えています。

（２）部屋での遊び

つぎに「部屋でのあそび」の内容を保護者世代と比較します。



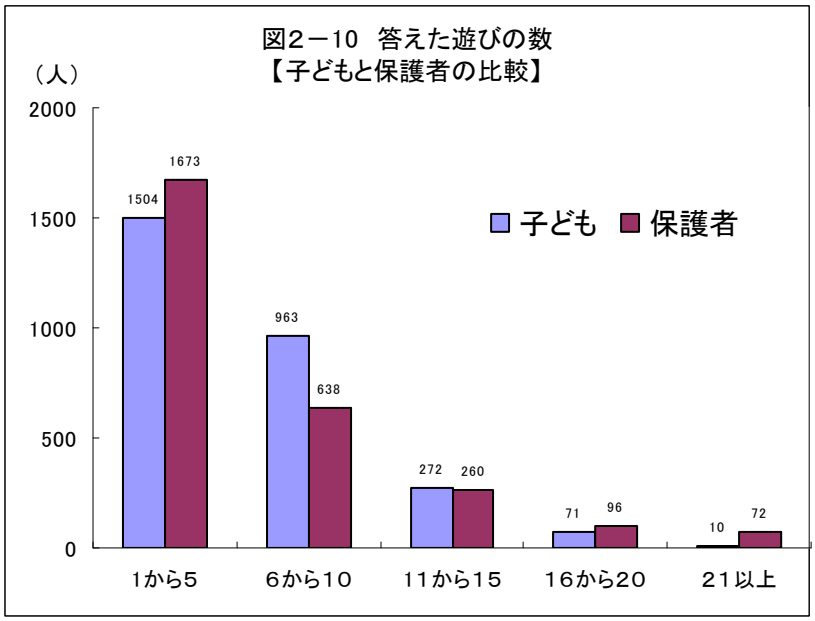
「部屋での遊び」をみると、第１位に「テレビ・ビデオを見る」という項目が非常に高い割合で入っています。つぎに「携帯型ゲーム機やテレビゲームでの遊び」が多く、いずれもメディアの利用が上位を占めています。続いて「本を読む」、「絵を描く」など、仲間や空間をあまり必要としない遊びが多いことが明らかになりました。また「外での遊び」と同じく、「おしゃべり」の割合が高くなっています。

保護者が子どもの頃の遊びは、相手を必要とする「ごっこ遊び」をはじめ、おもちゃや素材を使った遊びが多いことから、子どもたちの遊びは保護者世代とは異なっているという結果になりました。

・遊びの内容は、外遊び、室内での遊びともに、ゲームの浸透が顕著である
・室内では、テレビ・ビデオの視聴が特に高い

（３）遊びの多様性

つぎに、「遊びの多様性」についてみます。アンケート調査において「外で遊んでいる（遊んでいた）」と答えた遊びの数に着目し、子どもと保護者を比較します。なお、保護者の答えが「１から５」に多いのは、アンケート調査の回答欄の形式が子どもと保護者では異なり、保護者の回答記入欄の方が狭かったため、子どもの頃の代表的な遊びを抽出して答えた保護者が多くなったと考えられます。逆に、狭い回答記入欄にもかかわらず、答えた遊びの数が 16 以上あった保護者は、思い当たる遊びすべてを選んだといえます。そこで、とくに 16 以上、遊びを答えた子どもと保護者の数に着目して比較します。



子どもでは、16 から 20 種類の遊びを挙げたのは 71 人でしたが、保護者では 96 人いました。さらに 21 以上の遊びを挙げた子どもは 10 人でしたが、保護者では 72 人いました。子どもでは、27 種類の遊びを挙げた人が最高でしたが、保護者では 30 種類または 31 種類、つまり調査で示した項目すべてを選択した人が 6 人いました。

このことから、子どもたちは保護者世代よりも遊びの種類が減少していると考えられます。たとえば昔の子どもは遊びを 4000 知っていたが、今の子どもは 20 しか知らないといわれるように、子どもたちの遊びの多様性は、保護者世代に比べて失われつつあるといえます。

では、保護者の豊かな遊び経験は、今の子どもに継承されてはいないのでしょうか。ここでは、28 種類以上の遊びについて「遊んでいた」と答えた 10 人の保護者と、その人たちの子ども 10 人を比較しました。

図2－11　答えた遊びの数が多い保護者と子どもの比較

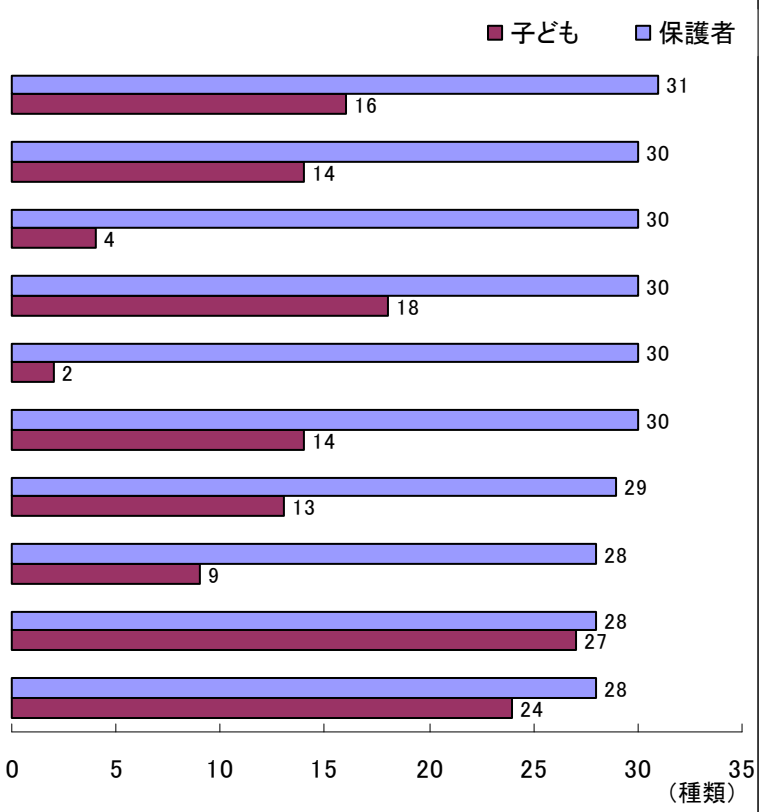


図２－10 では､遊びの種類を 10 種類以下しか挙げなかった子どもが 88%もいましたが、ここでは 10 人中３人のみでした。多様な遊び経験をもつ保護者の子どもの中に、答えた遊びの数が多いケースがみられます。

子どもの遊びの多様性は、全体的にみて保護者世代よりも失われつつあることは明らかですが、保護者自身の遊び経験の豊かさは、子どもの遊びの多様性に多少なりとも影響を与えているのかもしれません。

・子どもの遊びの多様性が失われつつある

5. 保護者の意識

今回の調査では、遊び場に対する満足度や、遊ぶことを禁止している場所などについて、保護者の声をたくさんいただくことができました。

ここでは、保護者の回答から見えてくる遊び場の現状や、保護者の意識が子どもの遊び場に与える影響についてみていきます。

（1）保護者が禁止している場所

まず、子どもが遊びに行くときに禁止している場所があるかどうかを尋ねました。

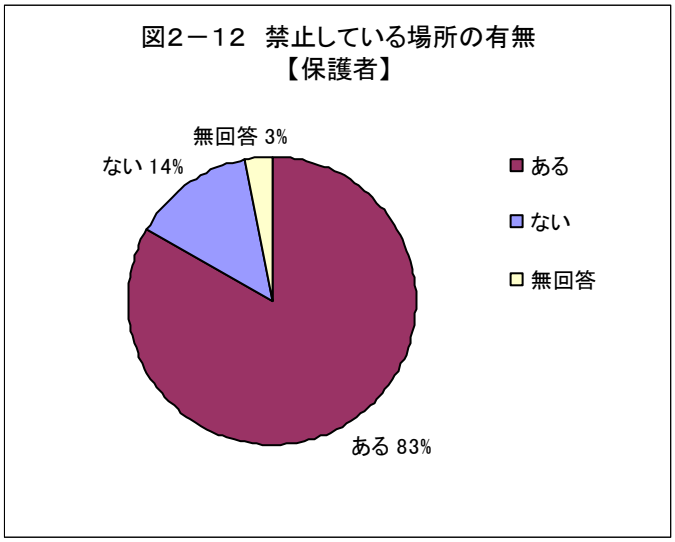
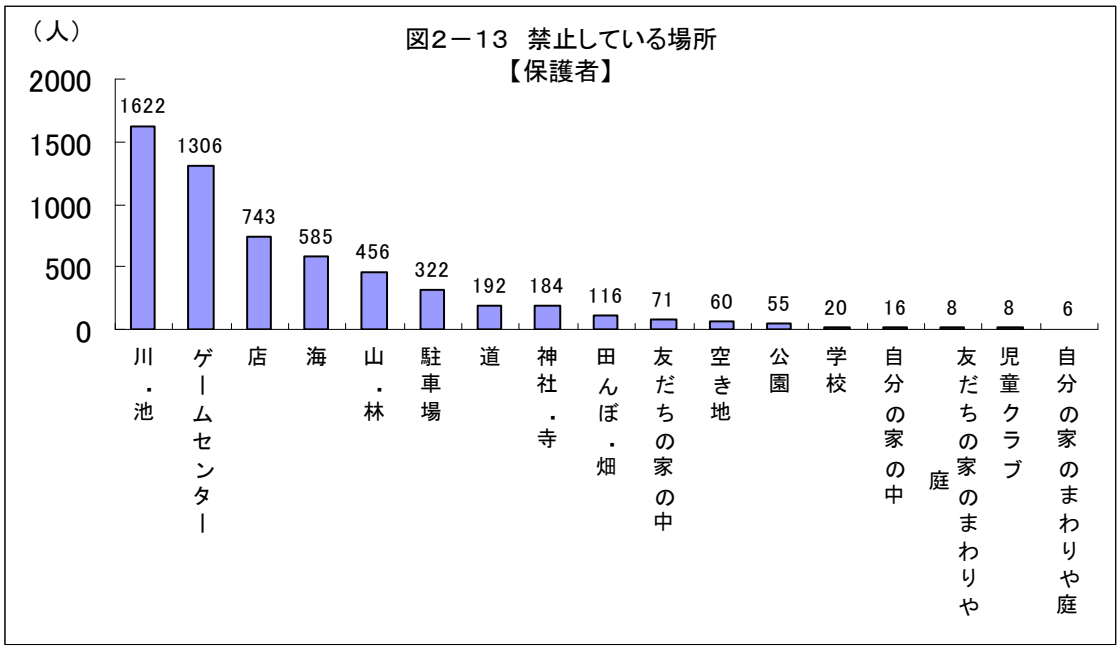


図２－12 のように、実に 83%の保護者が禁止している場所が「ある」と答えています。「ない」と答えたのは 14%であり、保護者の多くが、子どもの遊び場に関心を持ち、「好ましくない」と思う場所へ行くことに制限をかけていることがわかります。

次に、禁止している場所を詳しくみてみましょう。



川や池、海や山林などが、ゲームセンターや店と同じくらい、多く禁止されていることがわかります。

こうした自然の場が禁止されている理由としては、「大人の見守りの目がないので危険」という声が多数でした。以前は遊び集団が異年齢で構成され、年長児による見守りの中で遊ばれていましたが、現在では同学年の集団が多くなっているため、「見守りの目」を大人に求めているようです。

ゲームセンターや店を禁止している保護者の意見としては、「金銭面の問題」、「トラブルに巻き込まれる」、「野外で遊んで欲しいから」という回答がありました。

また、駐車場や道を禁止している意見として、自動車交通の激化による危険に対する不安の声が多くありました。

・保護者の意識は子どもの遊びに大きな影響を与えている

（2）保護者の満足度

社会環境が変わり、保護者から場所を制限されても、子どもたちは毎日遊んでいます。子どもが遊んでいる様子を見たり、子どもから話を聞いている保護者は、わが子のおかれている状況をどのように把握しているのでしょうか。保護者に対して、遊び場について満足しているか、いないかという質問をしてみました。

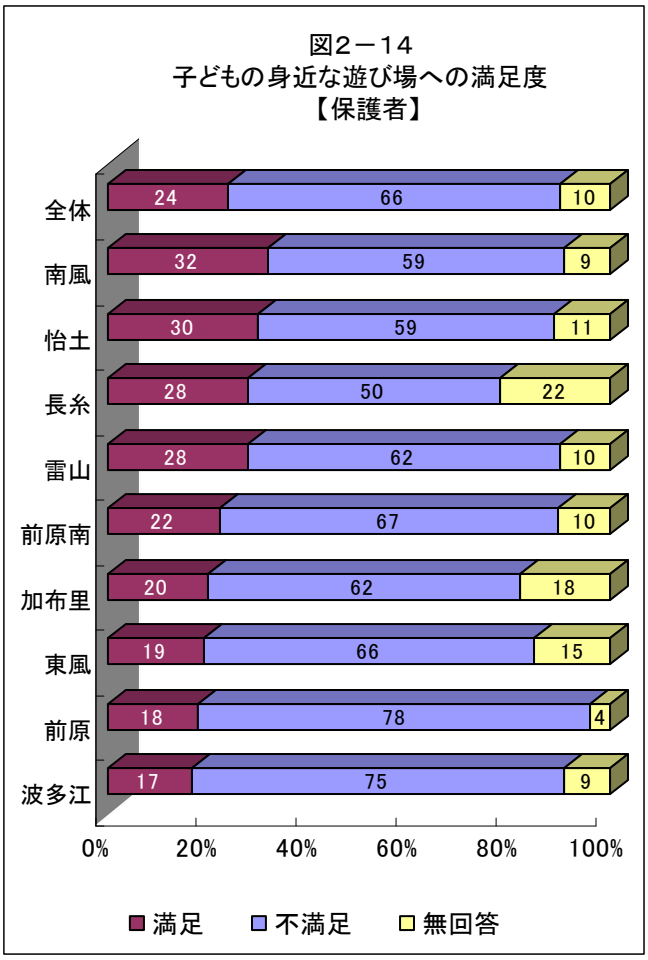


図２－14 から、前原市全体として、「満足している」が 24%、「満足していない」が 66%と、満足していない保護者の割合が高いことがわかりました。

自宅近辺に遊び場が少なく、校庭で遊ぶ子どもが多い国道沿いの校区において、とくに不満足の割合が高いことがわかります。

これに対して、南風校区は満足度がもっとも高く、自宅近辺の遊ぶ環境が比較的整っていることが反映されているようです。

・遊び場に対する保護者の満足度は低い

（3）満足度が低い理由

前原市では、遊び場に対する保護者の満足度は非常に低いことがわかりました。それは、一体何故なのでしょうか。何に対して不満足を抱いているのでしょうか。調査では、その理由について記述してもらいました。その一部を紹介します。

まず、もっとも多かったのは、「遊び場がない」という声でした。具体的には次のような声が挙げられました。

・近所に遊び場がない
・広い遊び場がない。思いっきり走りまわったり、ボールを遊びができる場所がない
・自由に遊べる場所がない。規制が多い

このように、「広くて自由に遊ぶことのできる公園が近くにないから不満足である」という声が大多数でした。「近くにある」という点は、遊びが生活に密着している小学生にとって、大変重要なことです。そして「広くて自由に遊べる」ことが、遊びの多様性を生み出し、魅力のある公園になる１つの条件でもあるようです。
また「ボール遊びができる場所が少ない」という声も、大変多く寄せられました。

次に、不満足の理由として多かったのは、「安心して遊べる場所がない」というものでした。具体的には、不審者に対する不安の声が大変多くありました。「不審者情報を聞くと、公園にも行かせられない」という声があり、見守りの目が求められていることがわかります。

波多江や前原など、とくに満足度の低い校区では、満足の理由にも不満足の理由にも「学校」が挙がっていることが特徴的です。まず満足の理由としては「学校が近いから」、「学校で遊んで安心だから」、不満足の理由としては「学校で遊べないから」、「遊ぶ場所が学校しかないから」という意見が多くみられました。

また、「ガラスやゴミが落ちている」という衛生面に対する声もありました。それ以外には、「自然の遊び場が少ない」「雨の日に行くところがない」とういう声が寄せられました。

・保護者の満足度が低い理由は「近くに自由に遊ぶことができる広い場所がない」という声が多い

2章のまとめ

遊び場の変化の原因を探っていくなかで、ならいごとの増加やメディアの浸透によって、子どもたちの遊ぶ時間が減っていること、また遊ぶ仲間が少なくなっていることなど、「3 間の喪失」のうち「2 間（時間と仲間)」については、前原市も全国的に指摘されている状況と同様の傾向にあることがわかりました。

もう１つの「１間（空間)」については、子どもが遊ぶのに十分な広さがある公園は少なく、自然や空き地などは多くあるけれど、うまく活用されていないという大変もったいない状況にあることがわかりました。

また、その背景には、社会環境の変化に伴う次のような問題もあることが、多くの保護者の回答からわかりました。

・車社会による事故の危険
・不審者に対する不安
・人目の少ない自然の中で子どもだけで遊ばせることに対する不安

実際、行ってはいけない場所を示すなど、子どもに対して「禁止」をしていることが、子どもが遊ぶ場所の選択肢を少なくしていると考えられます。

以前は、自宅のまわりに遊び場がたくさんありましたが、まちが整備されていく中で、「自由に遊ぶことができる広い遊び場が、子どもの身近なところから奪われていったこと」も遊ぶ場の変化の１つの要因と考えられます。

遊びの内容については、遊びの種類が減ってきている中、室内での遊びが中心になってきており、ゲームやテレビ視聴などメディアの浸透が顕著になっています。

この章では、「遊び場」が変化している原因と同時に、将来に向けての次のような課題が明らかになりました。

・残っている空間をどのように確保し、活用するか
・子どもを取り巻く環境の危険や不安をどのように解消していくか

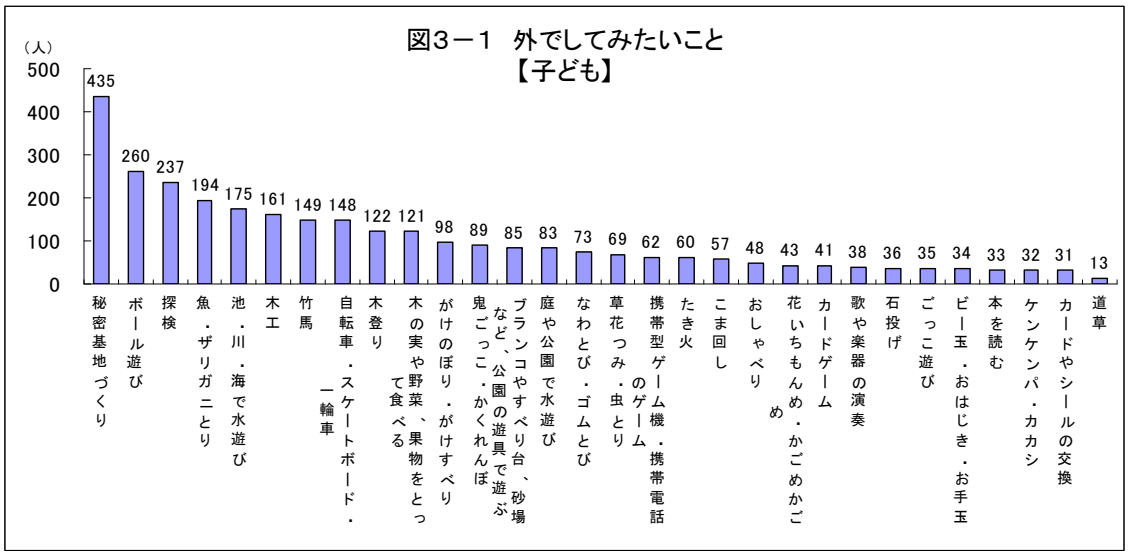
これらの課題に取り組み、これまでの遊び場の変化をより望ましい方向へと転換することで、子どもにとって必要不可欠な遊びの保障ができていくものと考えられます。

３章　　どのような「遊び場」が求められているのか

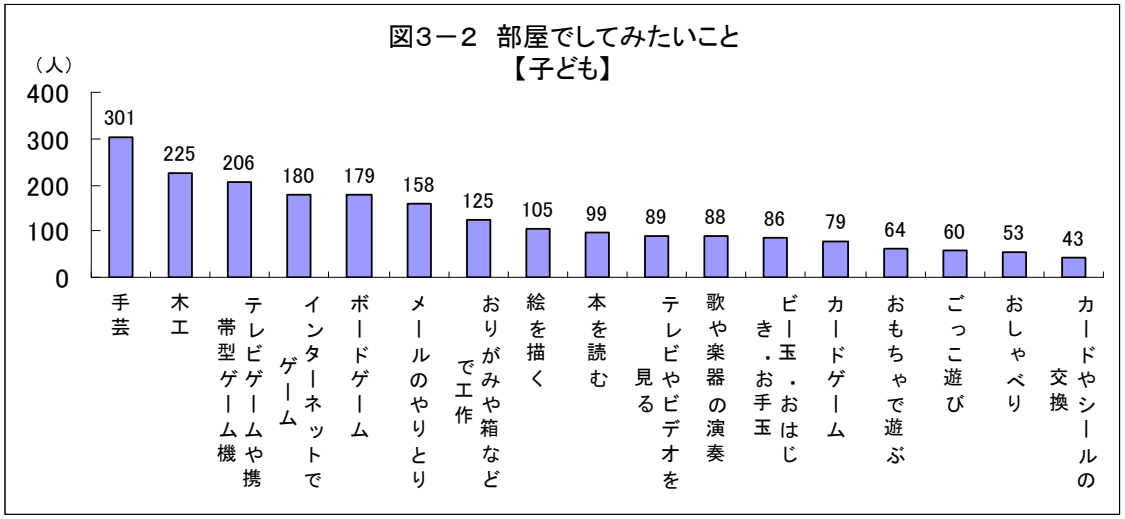
現代特有の環境の変化や社会問題によって、子どもたちの「遊び場」が影響を受けていることがわかりました。このような状況の中で、子どもたちはどのような「遊び場」を望んでいるのでしょうか。また保護者は、子どもたちにどのような場所で遊んでほしいと思っているのでしょうか。

1. 子どもがしたい遊び

保護者世代に比べ、遊びの多様性に乏しいと思われる現在の子どもたちですが、望んでいるのはどのような遊びなのか、アンケート調査の中で選択肢から選んでもらいました。なお、複数回答のため、数値は人数で示しています。



子どもたちが実際にしている遊びの中でもっとも多かったのは「ボール遊び」ですが、「外でしてみたいこと（図３－１）」では、「秘密基地づくり」が１位（435 人）でした。また、「探検（237 人）」、「魚・ザリガニとり（194 人）」、「池・川・海で水遊び（175 人）」など、自然の中での遊びが上位を占めていることがわかります。してみたいことは、今も昔もあまり変わらないようです。



「部屋でしてみたいこと（図３－２）」では、メディアとの接触が上位に挙がってきていますが、それよりも多かったのが、１位の「手芸（301 人）」、２位の「木工（225 人）」でした。「おりがみや箱などで工作（125 人）」、「絵を描く（105 人）」も上位に挙がっており、子どもたちは創造的な遊びを望んでいることがわかります。

アンケート調査では、子どもたちに「自由な時間がたくさんあったら、どこで、どんなことをして遊びたいですか？」という質問をし、自由記述で答えてもらいました。
そこでも、次のような声が寄せられました。

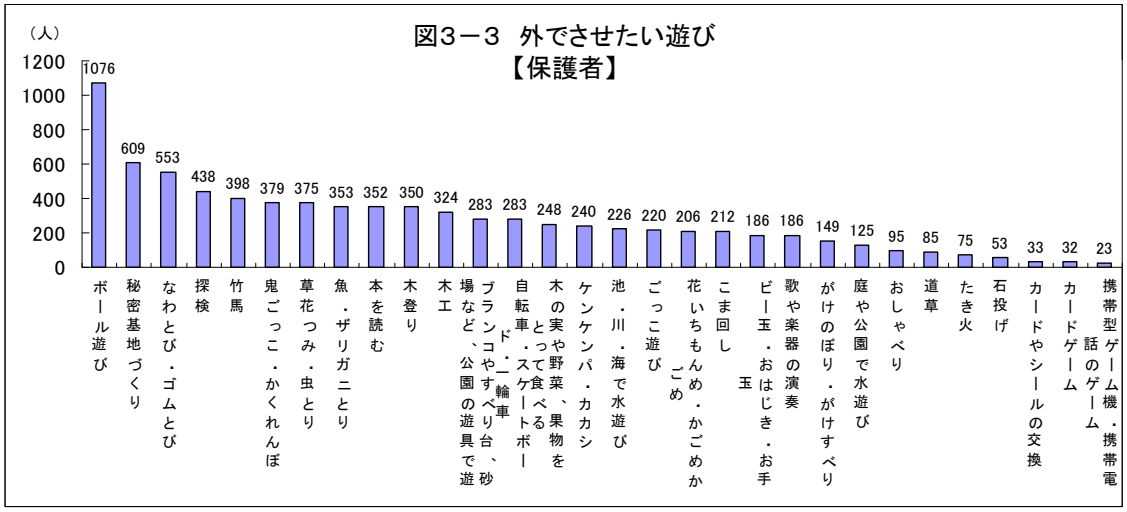
・木の上に家を作って遊びたい
・山で秘密基地を作りたい
・川で水遊びしたい
・公園で木登りしたい
・外の広いところで友だちと走りまわりたい

子どもたちは、昔と変わらず、自然の中での遊びやボール遊びなど、多様な遊びをしたいと思っており、そうした遊びを実現できる場が望まれます。

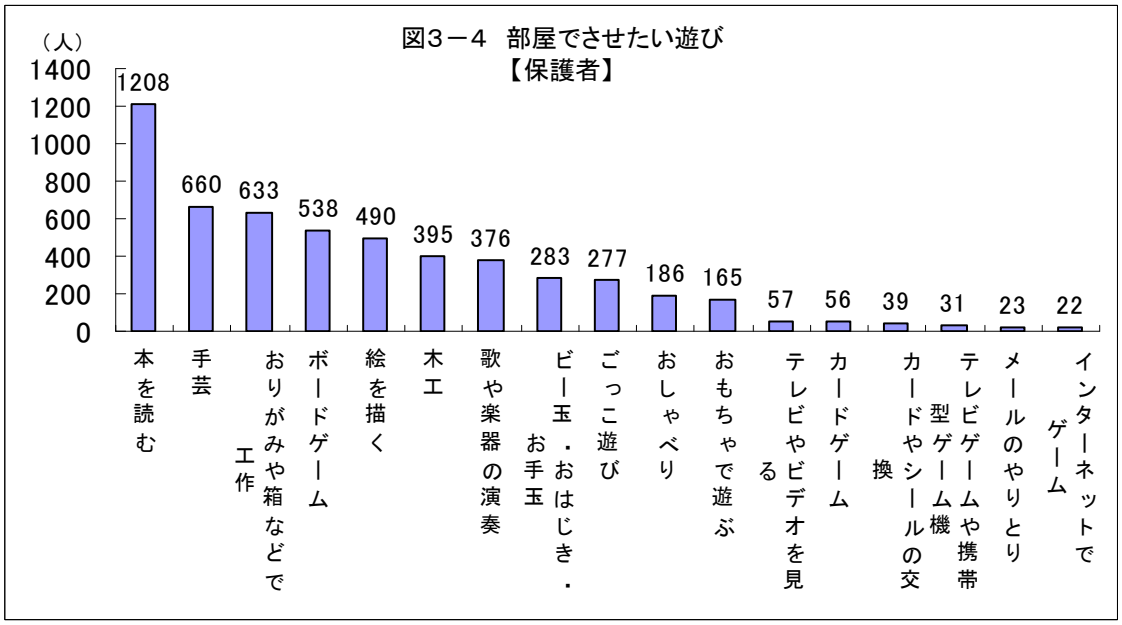
・子どものしてみたいことは、多岐にわたっており、それに応える場が望まれる

2. 保護者のさせたい遊び

保護者が子どもだった頃に比べ、社会状況が大きく変わってしまった今の子どもたち。その中で、保護者は子どもにどのように遊んでほしいと思っているのでしょうか。



保護者が「外でさせたい遊び（図３－３）」の１位は「ボール遊び（1076 人）」、２位は「秘密基地づくり（609 人）」です。順序は入れ替わりますが、子どもがしてみたい遊びと同じ項目が挙がっています。



「部屋でさせたい遊び（図３－４）」では、１位が「本を読む」でした。これは、外でさせたい遊びの１位「ボール遊び（1076 人）」を上回る 1208 人が回答しています。

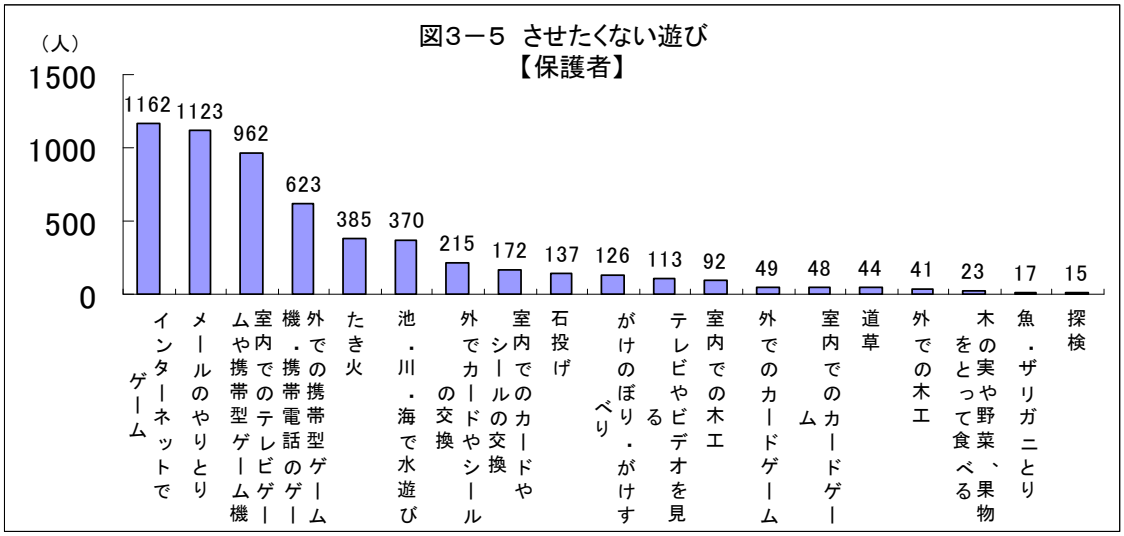
つづいて「手芸（660 人）」、「おりがみや箱などで工作（633 人）」が挙がっており、創造的な遊びが上位を占めていることがわかります。今回の調査では、保護者の回答者の内 90％が女性であるため、回答結果にそのことが反映されているとも考えられますが、子ども同様、保護者も創造的な遊びを望んでいることがわかります。

一方、メディアを媒体とした遊びは、保護者がさせたい遊びの中では最下位であることがわかりました。

・子どもも保護者も創造的な遊びを望んでいる

3. 保護者のさせたくない遊び

つぎに、アンケート調査において、保護者に「させたくない遊び」についても選択肢から選んでもらいました。複数回答のため、人数で示しています。



上位４位までをメディア関連の項目が占めました。保護者はインターネットやゲーム機での遊びを望んでいないことが明らかになりました。しかしながら、パソコンやゲーム機は、おそらく保護者が子どもに与えているものであると考えられます。喜ばしくはないと思いつつ、子どもに与えている保護者が多いということなのでしょうか。自由記述には、「外で遊ぶよりは、家でゲームをしてくれた方が安心」という声もあり、2 章でみられた現在の社会環境への不安が、この矛盾の一因なのかもしれません。

アンケート調査の「お子さまに、どんなところでどのように遊んでほしいと思われますか」という自由記述欄への回答には、「野外で異年齢のたくさんの友だちと、のびのびと走りまわって遊んでほしい」という声が、とても多く寄せられました。

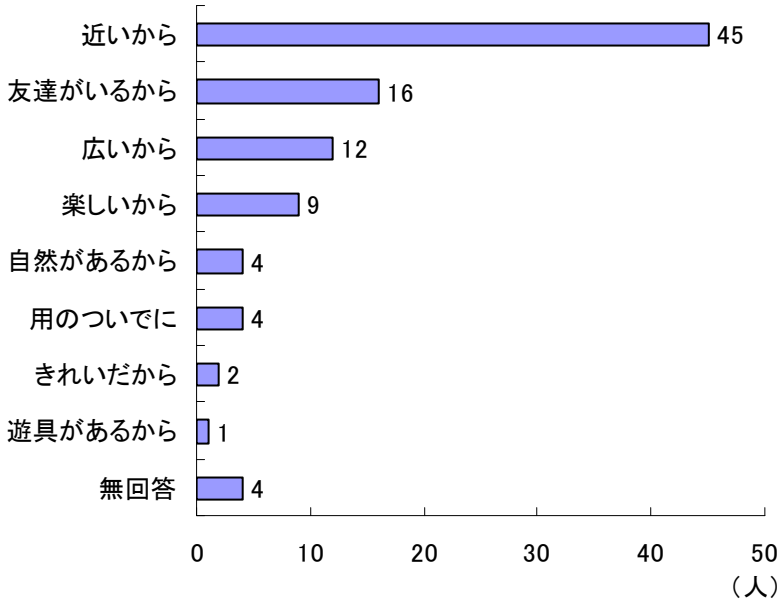
- 保護者はメディアでの遊びはさせたくないと思っている
- 保護者はさせたくないと思いながらも、実際には子どもは「メディア」で遊んでいる割合が高い
- 保護者は外で集団で体を使って遊べる広い遊び場を望んでいる
- 保護者は外での遊びに見守りの目を望んでいる

4. 子どもが遊び場を選ぶ理由

どんなに社会環境が悪くなろうとも､子どもはその中で楽しみを見つけて遊んでいます。家の中でゲームをしている子は増えてきているでしょうが、公園や空き地で友だちと元気に走りまわっている子どもたちもいます。

実態調査では、そんな子どもたちにインタビューを実施しました。その中で､「どうしてこの遊び場に来たのですか？」という質問を行い、次のような回答を得ました。

図３－６　遊びに来た理由
【実態調査でのインタビューより】



遊びに来た理由（図３－６）は､「近いから（45 人）」が他を大きく引き離し１位でした。遊びは子どもの生活そのものです。どんなによい公園でも、遠くにあっては意味がないとわかります。放課後、毎日でも自分の足で行けるところに遊び場があることが最重要なのです。

次いで､「友だちがいるから（16 人）」「広いから（12 人）」という理由が続きます。仲間が集まりやすい場所にあって、いろいろな遊びができる広さがあることが望まれています。

・子どもが自分の足で行ける生活圏に遊び場が望まれている

3 章のまとめ

子どもも保護者もともに望んでいる遊びは、創造的な遊び、自然の中でのびのびと遊ぶこと、ボール遊び等であることがわかりました。

一方、メディアを媒体とした遊びに関しては、子どもたちと保護者の間で違いがみられました。子どもたちは実際の遊びでも、してみたい遊びでも、メディアによる遊びの占める割合がとても大きかったのに対し、保護者はこれを望ましいと思っていないことがわかりました。

本章の考察から、現在の前原市には次のような場が望まれているということができます。

- 遊び場は子どもにとって「近く」にあることが何よりも重要
- ボール遊びや思いきり体を動かすことができる広々した遊び場
- やりたいこと（自然の中での遊びや創造的な遊びなど）が実現できる遊び場
- 大人の見守りの目があり、自然にも恵まれた場所

子どもにとって、遊びは生活そのもの。子どもが自分の足で行ける生活圏に、以上のような「遊び場」が望まれています。

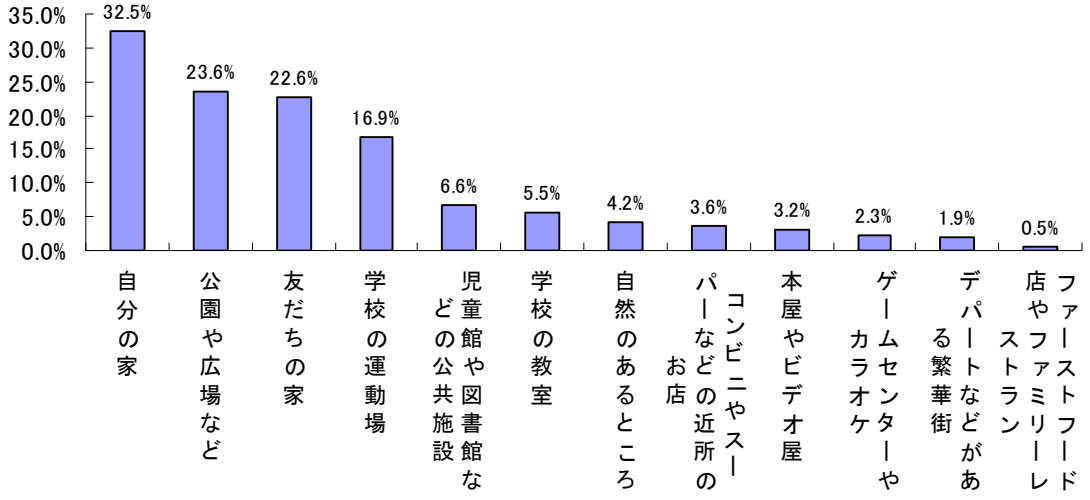
４章　全国・県内の調査との比較

全国および福岡県内で行われた子どもの遊びに関する調査と、今回の前原市内における調査を比較し、前原市の子どもたちの遊びの傾向をみます。

１. 遊ぶ場所

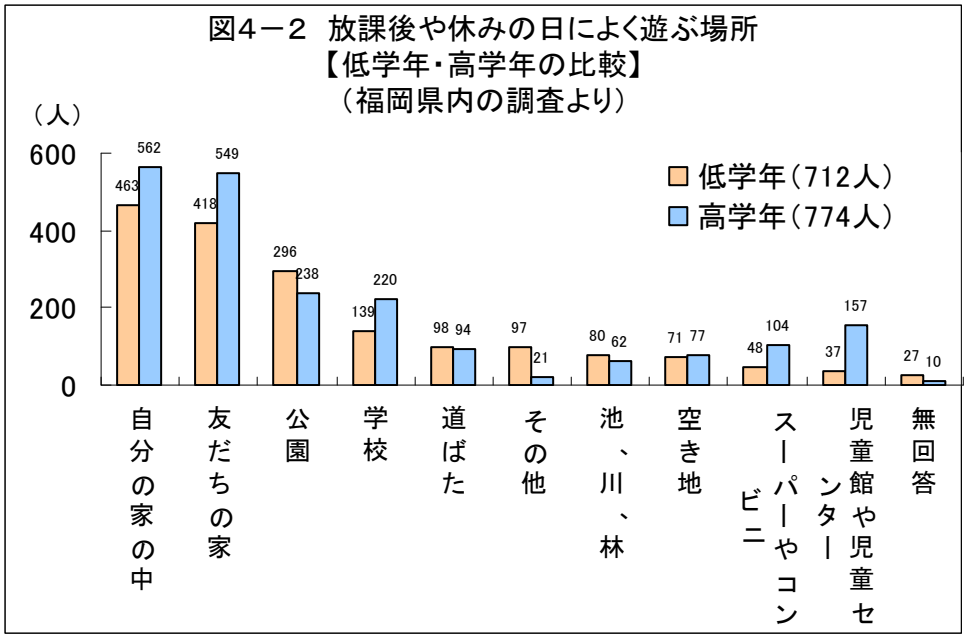
全国の小学生 4240 人を対象にした調査（図４－１、参照：資料１）では、「平日の放課後の過ごし方」で最も多い場所は「自分の家（32.5%）」でした。次いで「公園や広場など（23.6%）」が多く、第３位に「友だちの家（22.6%）」が挙がっています。

図4－1　平日の放課後の過ごし方【小学生 4240人】
（全国の調査より）



前原市の小学生（１章　図１－２）では、「家の中」と「家のまわり」の次に「公園」が挙げられていることから、前原市は「公園」で遊んでいる割合が、全国に比較して低いのではないかと考えられます。しかし、両調査とも、第４位に「学校」が入っており、放課後も「学校」で過ごしていることがわかります。

福岡県内で行われた同じような調査（図４－２、参照：資料２）では、「放課後や休日によく遊ぶ場所」を低学年（712 人）と高学年（774 人）間で比較しています。１位は「自分の家（低学年 463 人、高学年 562 人）」、２位は「友だちの家（低学年 419 人、高学年 549 人）」の順に多く、前原市の結果と似ています。



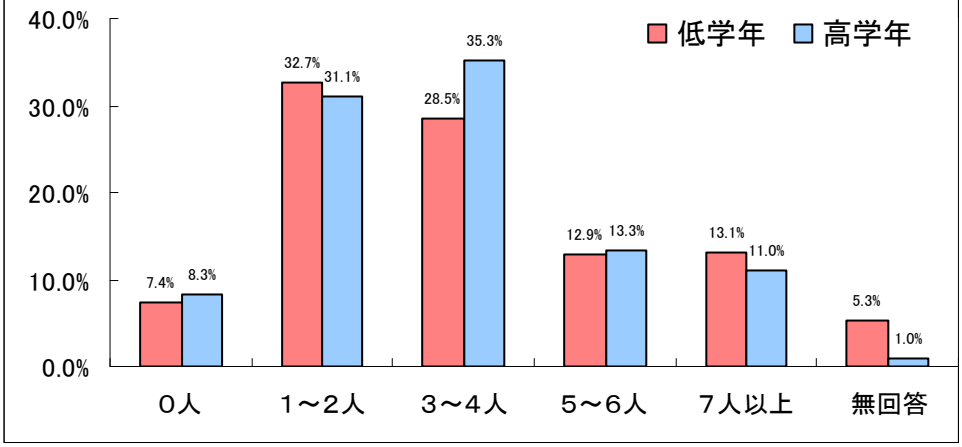
とくに注目したい点は、次に挙がっている「公園」と「学校」ですが、低学年では「公園（296 人）」と「学校（139 人）」の間にひらきがあるのに対し、高学年では「公園（238 人）」とあまり変わらない人数が「学校（220 人）」と答えています。学年が上がるにつれて、遊ぶ場としての「学校」の存在が大きくなっていくことが読み取れます。

また「児童館や児童センター」は、低学年ではあまり利用されていません（37 人）が、高学年では学校に次いで利用している（157 人）ことから、学年が上がるほど、このような施設を利用する傾向があると考えられます。前原市には、児童館や児童センターといった施設がないため、高学年の遊び場・居場所について検討する必要性が感じられます。

２. 遊ぶ人数

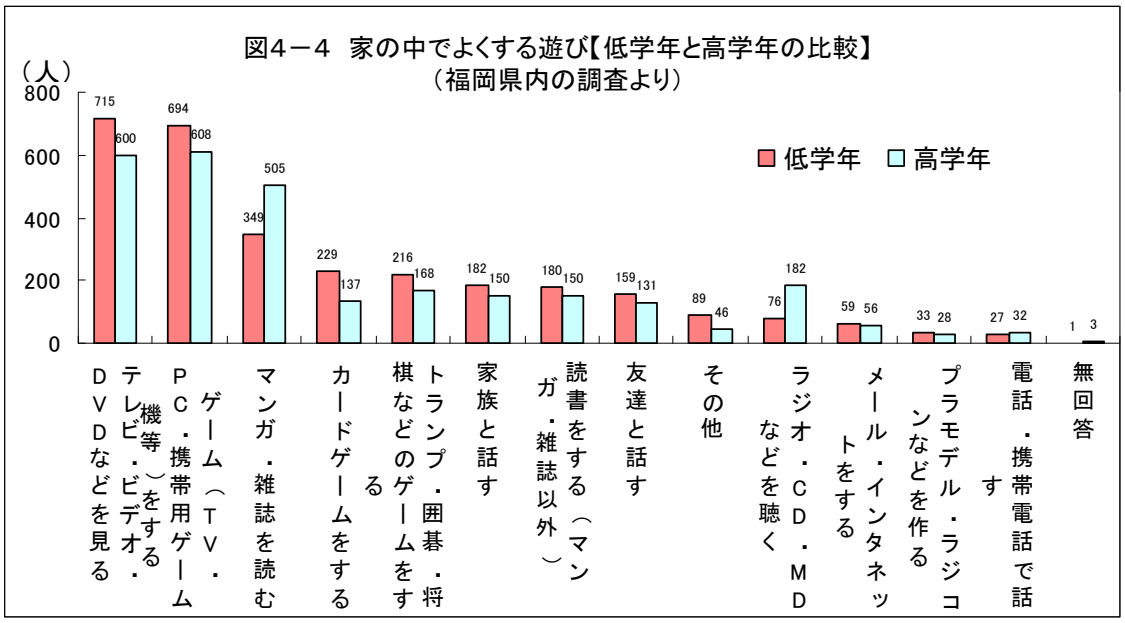
遊ぶ友だちの人数を福岡県内でみてみると、低学年・高学年共に「１～２人（低学年 32.7%、高学年 31.1%)」、「３～４人（低学年 28.5%、高学年 35.3%)」が多いことがわかります。前原市内の子ども（２章２．図２－３）では、54%の子どもが「３，４人」と答えています。しかし福岡県内では、「７人以上」と答えた子どもが低学年で 13.1%、高学年も 11%いるのに対し、前原市内では 4%しかいませんでした。

図4－3　近所でよく遊ぶ友だちの人数【低学年･高学年】
（福岡県内の調査より）



３. 遊びの内容

家の中でよくする遊びについての福岡県内の調査（図４－４）では、前原市内の調査と同様の結果でした。



家の中でよくする遊びの１位が「テレビ・ビデオ・DVD など」の視聴（低学年 715 人、高学年 600 人）、２位が「ゲーム」（低学年 694 人、高学年 608 人）と、メディアとの接触が大変多くなっています。ついで「マンガ・雑誌を読む」がとくに高学年（505 人）で多く、「ラジオ・CD・MD などを聴く」（182 人）が４位につづくことから、とくに高学年では、家の中で、少人数、あるいはひとりで過ごしている様子がうかがわれます。

子どもたちの遊びの首位を占めるようになってきている「メディア」との接触に着目した調査では、図４－５「テレビ・ビデオ（DVD）の視聴時間」で最も多いのは「２～３時間（33.7%）」でした。視聴の長時間傾向の理由としては、番組の放送時間に縛られること、他のことと並行してできること、自分以外の家族の視聴の影響もあることなどが考えられます。

図4－5　テレビ・ビデオ（DVD）の視聴時間
（全国の調査より）

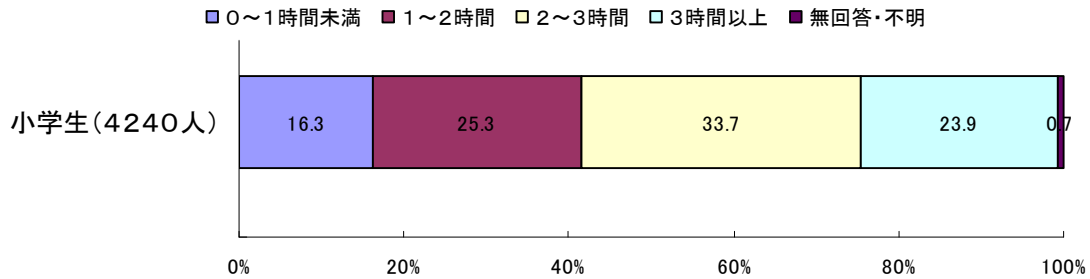


図4－6　テレビゲームで遊ぶ時間
（全国の調査より）

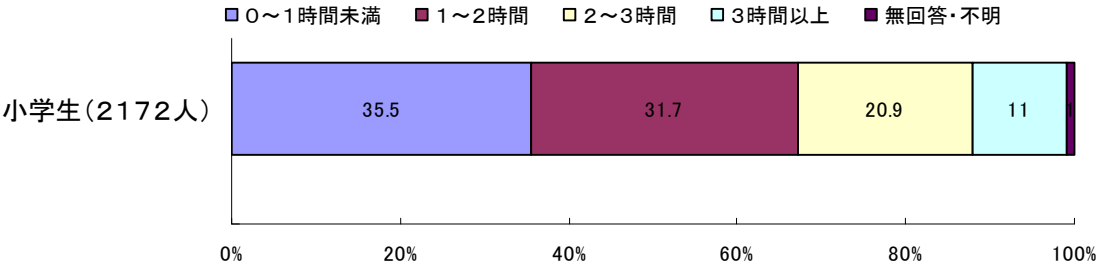
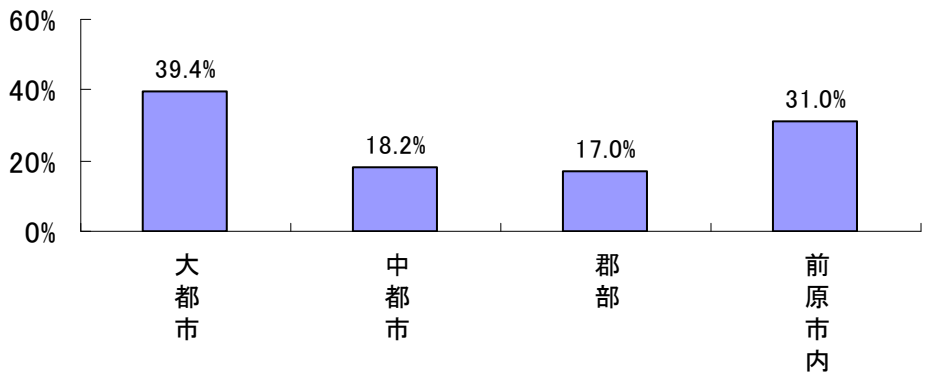


図４－６「テレビゲームで遊ぶ時間」では、「０～１時間（35.5%）」、「１～２時間（31.7%）」、「２～３時間（20.9%）」が多くなっていますが、２時間以上と答えた子どもを合わせると31.9%以上います。テレビゲームで遊ぶ時間は、家庭内で約束事が決められている場合も考えられますが、それにしても２時間以上遊んでいる子どもの割合は高いといえるのではないでしょうか。

４. 時間

ならいごとに費やしている時間に着目してみると、学習系のならいごとをしている割合は、全国では大都市（39.4%）、中都市（18.2%）、郡部（17.0%）と、都市部に行くほど割合が高くなっています。

図４－７　学習系のならいごとをしている割合【高学年】
（全国の調査および前原市内の調査より）



前原市内の高学年では、大都市に近い高い割合（31.0%）を示しています。学習系のならいごとに限ってみてもこれだけ高く、このことも、放課後の遊ぶ時間に少なからず影響を与えているものと考えられます。

4章のまとめ

前原市内の子どもの遊びの傾向は、全国的にも見られる傾向と重なる点が多いことがわかりました。中でも特徴的なのは、遊ぶ場所でもっとも多いのが「家の中」となっていること、またその家の中でよくする遊びの中に、メディアを媒体とした遊びが高い割合で入ってきているということでした。

一方、全国的な傾向と比較して、前原市内の子どもは、公園で遊ぶ割合が低い傾向にあること、さらに、いっしょに遊ぶ人数がやや少ないことがわかりました。

遊ぶ場所に関しては、前原市内には、児童館・児童センターといった、とくに高学年の子どもたちにとって過ごしやすい場が不足していることも見えてきましたが、その代わりに、全国的な傾向と同様、学校が放課後も遊ぶ場所としての役割を果たしているといえます。

ならいごとについては、前原市内の高学年は大都市並みに高い割合でならいごとをしていることがわかりました。このことは、２章でも述べたように、自由な「予定のない時間」の確保に影響していると考えられます。

参考資料　※本章で使用した図は、下記資料のデータを基に作成しました。

資料１：「第１回子ども生活実態基本調査」 Benesse 教育研究開発センター
2005 年 7 月発行
資料２：「子どもの遊び意識調査報告書」 福岡県　平成 14（2002）年 3 月発行

５章 遊び場の紹介

本章では、県内、全国、および海外でのユニークな遊び場や、遊び場づくりの活動例に着目します。前原市の子どもの遊び環境を考えるなかで、今後の参考になり得ると考えます。

１. 身近な遊び場

子どもの遊びは、本来、生活と密着しています。保護者世代が子どもの頃は、家の前の道や空き地、田んぼなど、生活圏内でさまざまな遊びがひろがっていましたが、現在は車をはじめとする危険が先行し、見守りの目も限られていて、安心して遊ぶことのできる身近な遊び場が減少しています。

ここでは、子どもの生活圏内にあって、安心して自由に遊ぶことができる場づくりの例を挙げます。

〇子どもの遊び場　きんしゃいきゃんぱす　（福岡市東区箱崎商店街）

学生・地域と協働で、商店街の店舗を毎日開放

2004 年 7 月にオープン。学生を中心としたスタッフ数名で運営し、子どもたちの放課後の時間に合わせて、ほぼ毎日開放しています。子どもが子どもを呼んで、毎日 20 名程の子どもたちが立ち寄り、思い思いに遊んでいます。対面販売の盛んな温か味のある商店街に位置しており、商店主や買い物客など、様々な大人と子どもの関わりが日常的に生まれています。多くの大人に見守られていることによって、路上で遊んだり、商店に遊びに行ったりと、まちで遊ぶ（＝まちを遊ぶ）ことも増えてきています。子どもたちとスタッフ、さらには地域の大人たちが、お互いを巻き込み合いながら、日々思いきり遊んでいます。

○深江アンビシャス広場（糸島郡二丈町）

公民館を利用して週2回開催

二丈町深江公民館にて、平成 13 年 10 月より週 2 回開所。平均 22 人の子どものうち、３割は中学生です。またボランティアが多いことも特色で、地域の 15 団体と個人（約 250 人）、学校、行政が関わっています。自由な広場は人気があり、卓球、テニス、読書などいろいろな内容を楽しんでいます。地域の子どもと大人の居場所として根付いてきています。

（参照：www.ambitious.pref.fukuoka.jp/hiroba/pdf/35.pdf ）

2. 運動公園・広場

子どもたちに人気のある「ボール遊び」ですが、調査の中でも見てきたように、思いきりボールを投げたり蹴ったりできる場所は限られています。ここでは、ボール遊びをはじめとする運動遊びができ、前原市民にもよく利用されている公園の例を挙げます。

○今津運動公園（福岡市西区今津）

施　設：体育館、ジョギングコース、多目的広場、健康遊歩道、
アスレチック広場、芝生広場、テニスコートなど

○引津運動公園（糸島郡志摩町）

施設：グランド、アスレチック、テニスコート、バスケットボールゴール、
スケートボード場など

３．やりたいことができる遊び場　―プレーパーク（冒険遊び場）―

今回の調査では、子どもたちのやりたいこと、そして保護者のさせたいことのなかに、自然の中での遊びが数多く挙がっていました。しかし実際には、自然に恵まれた遊びが難しい社会状況下にあります。

そのような中、注目されているのが「プレーパーク（冒険遊び場）」です。そこでは、子どもの成長にとって欠かせない自然の存在が重視され、子どもの遊びにひろがりや深まりをもたらす自然の素材（土・水・木・火など）が用いられています。また、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、子どものやりたいことを実現するため、プレーリーダー（プレーワーカー）という大人の見守りがあり、子どもはのびのびと遊ぶことができます。

プレーパークは遊び場の中でも、「運営」という要素があることが特徴的であり、おもに市民が構成する活動団体、あるいは行政によって支えられています。現在、「特定非営利活動法人　日本冒険遊び場づくり協会」に登録されている活動団体は 230 団体にのぼりますが、おそらく、これ以上の活動が各地で行われていると推測されます。

ここでは、数多くあるプレーパークの中でも、とくに活動が活発であったり、地域に根付いている例と、ネットワークをつくり支援をしている団体を紹介します。

（１）各地のプレーパーク

①県内

○ふくおかに冒険遊び場をつくろう会　（福岡市城南区）

行政と協働で月１回開催

城南区主催の子育てのイベントに、城南区内の大学とともに参画

（参照：http://www.geocities.jp/bouken_fukuoka）

○わくわくプレーパーク・福小まちづくりの会　子育て環境事業部（福津市）

街区公園において月１回開催

条例の力（福津市は都市再生整備計画において「公園リフレッシュ事業と連携したプレーパークの整備」を位置づけ、平成 20 年～23 年に６千万円の予算をかけて実施予定）

（参照：http://wagamachi.city.fukutsu.lg.jp/、http://www.city.fukutsu.lg.jp/）

○かすがに冒険遊び場をつくろう会（春日市）

文化センターに隣接した場所で開催　（参照：http://fukuoka-pp.net/kasuga.html）

○大野城プレーパーク（冒険遊び場）の会

NPO 法人チャイルドケアセンター大野城（大野城市）

行政・企業と協働　（参照：http://npo-ccc.net/playpark/index.html）

○乳幼児子育てネットワーク・ひまわり（北九州市）

大学と協働で開催　（参照：http://hi-ma.net/index.htm）

○頴田公民館　プレーパーク（飯塚市）

公民館・子ども会・地域と協働で開催

（参照：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/syakyo/nw/vol3/gaiyou.html）

○まえばるの遊び場ったい！（前原市）

健康福祉センターにて月１回開催

大学との協働によりキャンパスにてプレーパーク開催

（参照：http://www.itogura.net/news/playpark/pp.htm）

②全国

○羽根木プレーパーク　主催：NPO 法人　プレーパークせたがや（東京都世田谷区）
国際児童年を機に日本で最初に創られた常設のプレーパーク
世話人会と常駐のプレーリーダーを中心に、地域・行政と協働で運営
（参照：http://www.playpark.jp/）

○三つ叉冒険遊び場　たぬき山　主催：子ども広場あそべこどもたち（東京都町田市）
平日と週末の週２日開園
地域のボランティアスタッフとプレーリーダーで運営
（参照：http://www.tanuki-yama.com/）

○国分寺市プレイステーション（東京都国分寺市）
「国分寺市プレイステーション条例」を制定し、市の常設の施設として運営
「子ども野外活動事業」として、市内の公園で出前の遊び場事業を実施
（参照：http://members3.jcom.home.ne.jp/boukenasobibanokai/）

○西公園プレーパーク　主催：西公園プレーパークの会（仙台市）
プレーリーダーとともに常設を目指して、年間 200 日開催
（参照：http://homepage1.nifty.com/KUROBE/index.htm）

○千葉市子どもたちの森　主催：自然遊びわかばの会
（千葉市若葉区動物公園裏山子どもたちの森計画地）
「特色ある公園づくり」の取り組みから、自治体主導で動き出した事業
（参照：http://blog.goo.ne.jp/kodomori/）

○冒険遊び場「ちょっとバン」　主催：冒険遊び場「ちょっと・バン」をつくる会
（大阪府堺市）
大型児童館横の敷地で開催
プレーリーダー在駐
（参照：chottobang@anet.ne.jp）

○さが冒険遊び場　主催：SAGA（佐賀市）
児童館内の敷地で開催
まちづくりの企画にも積極的に参画
（参照：http://www2.bunbun.ne.jp/~vivaasobiba/）

（２）プレーパークの支援団体・ネットワーク

○福岡プレーパークの会（福岡市）

「子どもが自由に遊べる居場所づくり」をテーマに、プレーパーク（冒険遊び場）活動に取り組んでいます。情報発信、研修・講座、プレーパーク開催を活動の主な柱としています。2006 年には県内５ヵ所で地域と連携してプレーパークを開催し、県内のプレーパーク活動をまとめた『ふくおかプレーパークブック』を発行するなど、多彩な活動を繰り広げています。2008 年は学生対象のプレーワーカー育成プログラムに取り組んでおり、プレーワーカーの養成・派遣にも力を入れています。

（参照：http://fukuoka-pp.net/）

○日本冒険遊び場づくり協会

全国規模で冒険遊び場を支援、普及、啓発していくための日本で唯一の NPO 組織です。東京都世田谷区で市民の手による冒険遊び場が開設されて 30 余年、その歴史と経験、知恵、そしてネットワークを基盤として活動を展開しています。子どもの遊び環境の貧しさに加えて、少子化や犯罪の増加などで、遊び場づくりへの関心が高まり、「冒険遊び場を立ち上げたい」「活動への応援や支援がほしい」という問い合わせが増えています。

（参照：http://ipa-japan.org/asobiba/）

○London Play（イギリス・ロンドン）

イギリスでは 1946 年にデンマークの廃材遊び場が紹介されて以来、冒険遊び場が全国にひろがり、1970 年代にはその数は全国で 260 ヵ所といわれました。助成の打ち切りなどにより、冒険遊び場の運営が困窮した時期を経て、現在は国や自治体をあげて、子どもたちの遊びの質と遊び場の向上にむけての政策や事業が行われるようになりました。

ロンドンの冒険遊び場（Adventure Playgrounds）は、ロンドンの子どもたちのために質の高い遊びの機会と遊び場の改善を目指す組織 London Play を中心としたネットワークをもち、80 ヵ所が開設されています。

とくに「プレーワーク」とよばれる役割については、専門的な知識と経験を必要とするものとして資格認定があります。

（参照：http://www.londonplay.org.uk/）

５章参考文献：

『子育て応援 BOOK「はじめのいっぽ」vol.2
～福岡発！地域でつくる子どもの遊び場＆プレーパーク編～』
福岡県立社会教育総合センター　子育て応援 BOOK 冊子づくり委員会
2006 年 10 月 25 日発行

『Spirit of Adventure　play 2007 イギリスの冒険遊び場事情』
イギリスの冒険遊び場に行って来たぞー！！チーム　2007 年 7 月 6 日発行

『西公園プレーパーク写真集（暫定版）』
西公園プレーパークの会　2008 年 1 月 23 日発行

『第４回冒険遊び場づくり全国研究集会報告書　―遊びで社会が変わる―』
特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会　2008 年 3 月 20 日発行

まとめ

本報告書では、前原市の子どもたちの「遊び・遊び場」の現状について明らかにするために、市内全小学生と保護者を対象にした『アンケート調査』と、調査員が「遊び場」に赴き記録した『実態調査』の２つの調査結果を分析してきました。

各章の内容を、ここにまとめます。

１章　子どもはどこで遊んでいるのか

遊ぶ場所の変化と、子どもが実際に遊んでいる場所を明らかにしました。

〇子どもがよく遊ぶ場所は、外から部屋の中へと大きく変化している　（⇒P6～7）

〇自然の中で遊ぶ子どもは減り、学校や公園で遊ぶ子どもが増えている（⇒P6～13）

〇市街地域では、自宅近辺に遊び場が少なく、学校（校庭）の重要性が高い（⇒P8～13）

〇子どもは自宅近くにある、やりたいことをして遊べる場所を選んで遊んでいる（⇒P8～13）

２章　「遊び場」が変化している原因はどこにあるのか

子どもの遊ぶ場所が変化している原因について、５つの視点から探りました。

(1) 子どもの「時間」

〇ならいごとの増加やメディアの浸透によって、子どもの遊ぶ時間は減っている（⇒P18～19）

(2) 遊ぶ「仲間」

〇子どもの遊ぶ人数は、保護者世代に比べ、減少している　（⇒P20～21）

(3) 遊ぶ「場所」

〇子どものまわりの自然は、遊び場としてあまり活用されていない

〇子どもが遊ぶのに十分な広さがある公園が少ない　（⇒P22～24）

(4) 遊びの内容

○遊びの内容は、外遊び・部屋での遊びともに、ゲームの浸透が顕著である

○室内では、テレビ・ビデオの視聴がとくに多い

○遊びの多様性が失われつつあり、遊びの内容も変化してきている　(⇒P26～29)

(5) 保護者の意識

○車社会となり、事故の危険、不審者に対する不安、自然の中は人目がなくて心配といった不安を抱える保護者が多く、子どもに規制を加え、それによって遊びにも大きな影響を与えている

○遊び場に対する保護者の満足度は低く、その理由として、「近くに自由に遊ぶことができる広い場所がない」という声が多い　(⇒P30～33)

３章　どのような「遊び場」が求められているのか

子どもの「遊び場」が、現代特有の環境の変化や社会問題の影響を受けるなか、子どもたちと保護者が望んでいる「遊び場」について探りました。

○子どものしてみたいことは、創造的な遊び、自然の中での遊び、ボール遊びのほか多岐にわたっており、それに応える場が望まれている　(⇒P36～37)

○保護者は、子どもが外で体を使って集団で遊べる広い場所を望んでいる(⇒P38～40)

○保護者は、子どもにメディアでの遊びはさせたくないと思っている　(⇒P40)

○保護者は、外での遊びに見守りの目を望んでいる　(⇒P40)

○子どもが自分の足で行くことができる生活圏に遊び場が望まれている　(⇒P41)

４章　全国. 県内の調査との比較

今回の調査で明らかになってきた前原市内の子どもの遊びの傾向について、全国および県内の小学生を対象に行われた調査データを参考に、さらに分析を加えました。

○前原市内の子どもの遊びの傾向は、全国的な傾向と重なる部分が多く、とくに、遊ぶ場所で最も多いのは「家の中」であるという点、また、家の中でよくする遊びに、メディア関連の遊びが高い割合で入っているという点が一致している
(⇒P43～44，P46～47)

○全国的傾向と比較して、前原市内の子どもは公園で遊ぶ割合が低い　(⇒P43～44)

○全国的傾向と比較して、前原市内の子どもは一緒に遊ぶ人数がやや少ない (⇒P45)

○前原市内のならいごとをしている高学年の子どもの割合は、全国の大都市並みの高い傾向にある　(⇒P48)

５章　遊び場紹介

３章で明らかになったように、子どもや保護者が望んでいる遊び場には、おもに次の３つの要素が求められていることがわかりました。

・子どもの生活圏にあり、安心して自由に遊ぶことのできる場所
・ボール遊びなど、体を使って思いきり遊べる広い場所
・やりたいことができる場所

そこで、こうした思いに応えている全国の遊び場の中から、今後、前原市においても参考にしたい事例を３つのタイプに分けて紹介しました。

１　身近な遊び場　(⇒P50～51)
２　運動公園・広場　(⇒51)
３　プレーパーク　(⇒P52～55)

以上、各章でみてきたことを通して、前原の子どもの「遊び・遊び場」は現代の社会環境の影響を大きく受け、次のような状況にあることがわかりました。

○車社会による事故の危険性が高まる
○不審者に対する不安が強まる
○自然の中は人目がなく子どもだけでは心配
○２間（時間・仲間）の減少
○空間が有効に活用されていない

これらのことは、一般的にいわれている状況とほぼ同じであるようです。
前原市では、このような状況にあって、とくに５点目の「空間の利用」については、今後検討すれば改善の余地があると考えられます。

１章　子どもはどこで遊んでいるのか

前原市には、自然や空き地など多く残っているように思えますが、子どもたちはそこで遊べているのでしょうか。遊べていないとすると、まちのどこで子どもたちは遊んでいるのでしょうか。

「広い場所で思いきり遊びたい」、「大人は外で遊べというけど、どこで遊んだらいいと？」という子どもの声や、「子どもには外で遊んでほしいが、遊べる場所がない、安全な場所がない」という保護者の声を耳にすることが多々ありますが、現実にはどのような状態なのでしょうか。

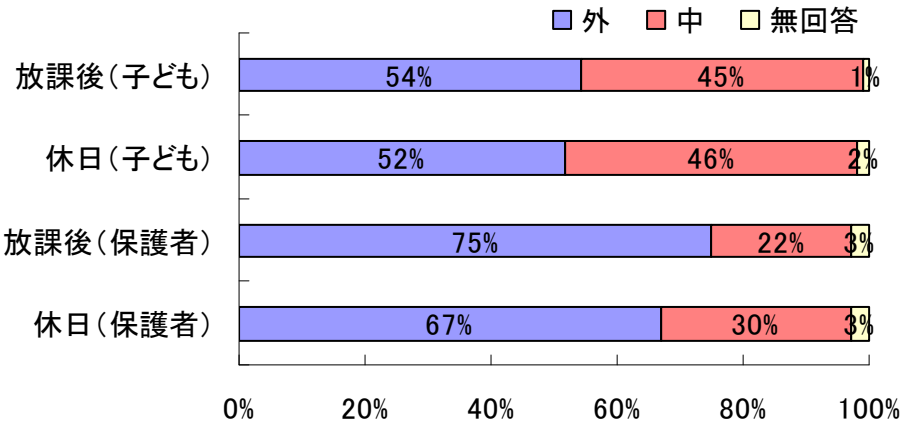
本章では、現在の前原市における子どもの遊び場について、①遊ぶ場所の変化と、②子どもが実際に遊んでいる場所を、「遊び・遊び場アンケート」の分析結果から明らかにしていきます。

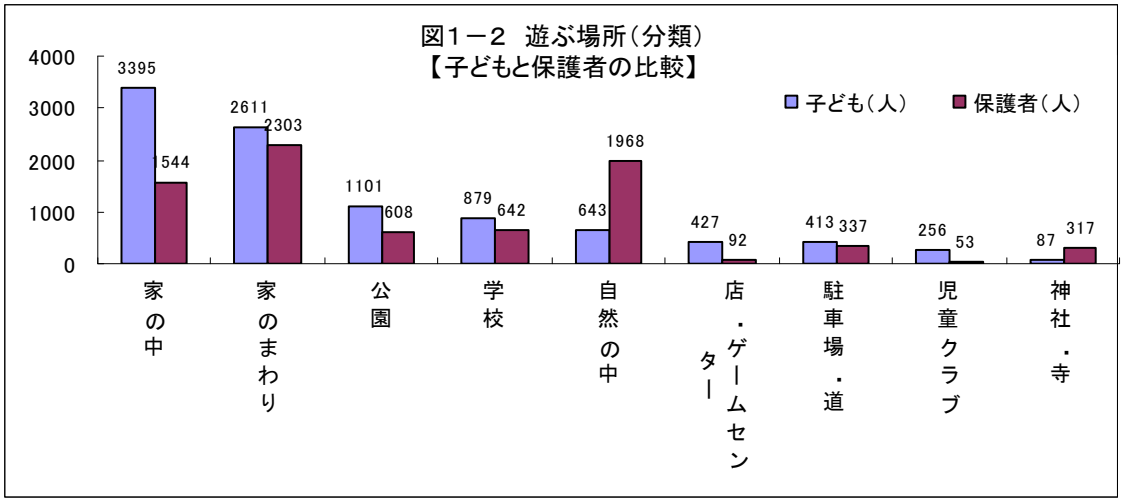
１．遊ぶ「場所」の変化

子どもが遊ぶ場所と、保護者が子ども時代に遊んでいた場所を比較し、主な遊び場が変化しているのかどうかを分析しました。

図１－１は、放課後と休日において、「外」か「部屋の中」かどちらで遊ぶことが多いかを示した図です。図１－２は、具体的によく遊んでいる場所、遊んでいた場所を１７の選択肢の中から選んでもらった回答（複数回答）です。いずれも子どもと保護者とを比較しています。

図１－１　外か中かどちらで遊ぶことが多いか
【子どもと保護者の比較】





＜図１－２　遊ぶ場所の分類方法＞

①家の中（自分の家の中、友だちの家の中）

②家のまわり（自分の家のまわりや庭、友達の家のまわりや庭）　③公園　④学校

⑤自然の中（空き地、田んぼ、畑、川・池、山・林、海）　⑥店・ゲームセンター

⑦駐車場・道　⑧児童クラブ　⑨神社・寺

図１－１のように、外遊びの方が多いという回答は、子どもが 52～54%、保護者が 67～75%でした。このことから、保護者の方が、今の子どもよりも外でよく遊んでいたことがうかがえます。

図１－２では、子どもが遊ぶ場所で最も多いのが「家の中」（3395 人）、次いで「家のまわり」（2611 人）であるのに対し、保護者では「家のまわり」（2303 人）が最も多く、次に「自然の中」（1968 人）と外が続き、3 番目が「家の中」（1544 人）となっていました。

保護者世代と比較すると、今の子どもは、部屋の中で遊ぶことが激増していることがわかります。

また保護者が子どもの頃によく遊んでいた「自然の中」や「神社・寺」は大幅に減り、かわりに「公園」や「学校」といった公共の場所が増えていることがわかりました。

なかでも女の子にみられる特徴として、外よりも室内で遊ぶ割合の方が高い傾向にあります。保護者世代の回答者に男性が少ないことを考慮すると、外遊びはここでみられる数字以上に激減していることが考えられます。

・子どもがよく遊ぶ場所は、外から部屋の中へと大きく変化している
・自然の中で遊ぶ子どもは減り、学校や公園で遊ぶ子どもが増えている

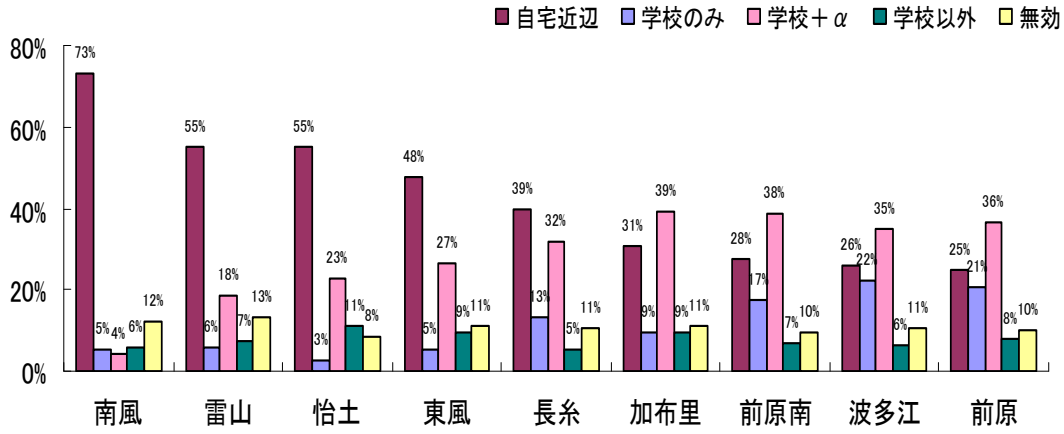
2. 地図から読みとれる「遊び場」

子どもの自宅を中心として、そこから遊び場までの広がりをみるために、アンケート調査に各校区の地図を載せ、自宅と遊んでいる場所それぞれに印をつけてもらいました。そこからは、子どもたちが意識の上で、どこを遊び場として捉えているのか、読みとることができました。

地図をみていくと、「自宅近辺」と「学校」に遊び場として多く印がつけられていました。そこで、まず各校区について、次の４つの分類を行いました。

①自宅近辺のみを遊び場としている
②小学校のみを遊び場としている
③小学校を含む、様々なところを遊び場としている
④小学校を含まないところを遊び場としている

図1－3　地図からみたよく遊ぶ場所【校区別】



その結果（図１－３）、９つの小学校区（以下、校区とする）を、３つの特徴によってグループ化できることがわかりました。

第１は国道沿いにある市街地域の校区（前原小学校、加布里小学校、波多江小学校、前原南小学校）、第２は田園地域の校区（長糸小学校、雷山小学校、怡土小学校、東風小学校）、第３は南風校区です。

それぞれのグループには、次のような興味深い特徴がみられました。

（1）市街地域（国道沿い）の校区

自宅近辺よりも学校などで遊ぶ割合が高い。

遊び場としての学校の存在が非常に大きい。

（2）田園地域の校区

自宅近辺で遊ぶ割合が高い。

学校も遊び場のひとつとみなされているが、様々なところでも遊んでいる。

（3）南風校区

自宅近辺で遊ぶ割合が特に高い。

学校が遊び場としては、あまり受け取られていない。

理由・・・・・・街づくりの段階から子どもの遊びのことも考えられているため、自宅近くに広い公園があったり、遊ぶことのできる道路や空き地があるからと考えられる。

子どもがよく遊ぶ場所の傾向

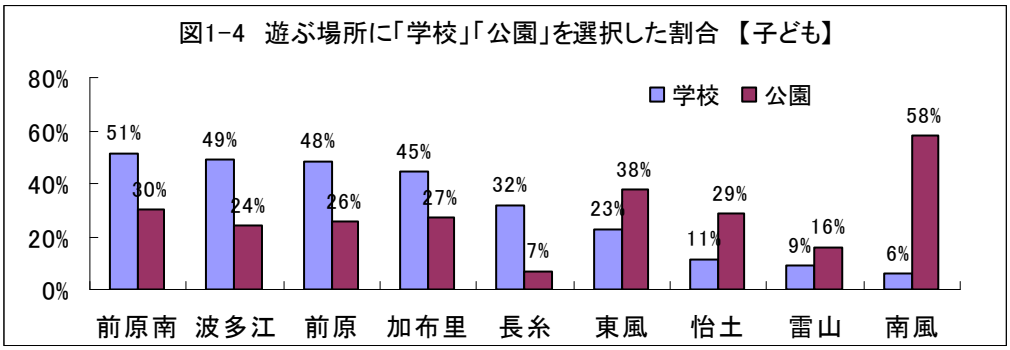
	市街地域	田園地域	南風校区
自宅近辺	△	○	◎
学校	◎	○	△

3. 子どもの自由記述から読みとれる「遊び場」

本章１において、子どもは保護者世代に比べて学校や公園で遊ぶことが増えていることがわかりました。また、本章２においては、校区によって子どもが遊び場として捉えている場所に違いがあることがわかりました。

そこで、これらの傾向についてさらに分析するために、とくにどのような公園で遊んでいるのかという点について、子どもの自由記述からみていきます。

図１－４は、よく遊ぶ場所に「学校」や「公園」を選んだ子どもの校区別の割合です。



まず、南風校区は、公園で遊ぶ子どもが 58%ととくに多いことがわかります。

そこで、11 頁の表 A に着目します。これは、子どもが名前をあげた「よく遊ぶ」公園名と面積です。子どもの回答者数が多かった公園から 30 ヶ所あげています。各校区の数字は、回答者の人数です。

この表 A から、南風校区の子どもが遊んでいる公園は 1400～5410 ㎡といずれも面積が広いことや、多くの子ども（22～108 人）が公園の名前を知っており、そこでよく遊んでいることがわかります。なお、学校で遊ぶ子どもは全体の 6%でした。

一方、国道沿いの校区では、公園よりも学校で遊ぶ子どもの方が多いことがわかります。学校で遊ぶ子どもは、前原南校区 51%、波多江校区 49%、前原校区 48%、加布里校区 45%と、南風校区の７倍以上でした。

この４校区で公園を選んだ子どもは全体の 24～30%でした。また、よく遊ばれている公園の１位と２位は、次の通りです。

前原南－①篠原公園（1642 ㎡）34 人　　②桃山公園（519 ㎡）13 人
波多江－①高田東公園（1587 ㎡）17 人　①今津運動公園（福岡市西区）17 人
前　原－①丸田公園（3302 ㎡）31 人　　②丸田池公園（34875 ㎡）24 人
加布里－①浜の園公園（2043 ㎡）20 人　②神在１２公園（896 ㎡）18 人

表Ａ　子どもが遊んでいると答えた公園　上位 30 ヶ所

順	公園名	面積㎡	前原南	波多江	前原	加布里	長糸	東風	怡土	雷山	南風
1	南風中央	4577									108
2	荻浦はな咲	4600	1								72
3	今津運動公園		3	17	18	2		11	5	2	13
4	ゆめ咲	1200									60
5	潤	1779		2				57			
6	みず咲	4715									48
7	南風西	2000									39
8	浦志	1911			13			22			
9	篠原	1642	34								
10	丸田	3302	1		31						
11	笹山	77507	8		3						18
11	南風北	5410			2						27
13	丸田池	34875	1		24	1					1
14	南風東	2500									25
15	ほし咲	1400									22
16	浜ノ園	2043				20					
17	神在第１２	896				18					
18	高田東	1587		17							
18	潤南	1787						17			
20	桃山	519	13								
21	曽根中央	1892							12		
21	池田公民館	119		12							
23	平原歴史	4320							9	1	
23	ファームパーク			1					9		
25	大門	996							8		
26	あごら			3				4			
26	小戸		1		5						1
28	高田第１	329		6							
28	志登	343						6			
30	神社（三雲）	196							5		

子どもは、自宅の近所にあるボール遊びなどができそうなくらいの面積がある比較的広い公園を選んでいるようです。その一方で、市内の公園 143 ヶ所のうち、面積が 300 ㎡未満の 85 ヶ所の公園をあげた子どもの数は合計で７人だけでした。この結果から、公園の広さが大きなポイントであることがうかがえます。

ただし、面積の広い公園ばかりが選ばれているのかというとそうでもない場合もあります。面積の広い次の６つの公園の回答者は合計で３人しかいませんでした。

加布里－宮地岳自然公園	21894 ㎡	
加布里公園	20616 ㎡	
釜塚公園	3780 ㎡	
神在公園	3404 ㎡	
前　原－前原中央公園	10867 ㎡	
波多江－波多江東公園	3431 ㎡	（校区内で最も広く新しくきれいな公園）

子どもたちは、家から近くて自分たちが遊びやすい公園を選んでいるといえるようです。面積のそれほど広くない「神在第 12 公園」がその例です。この例からわかるのは、子どもたちは、いくつかある公園の中でも、とくに住宅地の中で車などの通り抜けが少なく、周囲の道や横の川土手なども併せて遊ぶことができるこの公園を選んでいるということです。

東風校区の場合は、３つの公園を中心に多くの子どもたちが遊んでいました（38%）。それらは、①潤公園（1779 ㎡）57 人、　②浦志公園（1911 ㎡）22 人、　③潤南公園（1787 ㎡）17 人でした。この 3 つの公園に子どもたちが集中しているのは、子どもの家に近い場所に適度な広さの公園がバランスよく配置されているためと思われます。また、学校でも 23%が遊んでいました。

南風校区に次いで遊ばれている公園の数が多かったのは怡土校区です。全体の 29%が公園で遊んでいました。このような結果になったのは、他の校区よりも、公園の数が多く、面積も広めの公園がいくつかあり、遊びやすいためと思われます。回答した子どもの数と公園の面積は、①曽根中央公園（1892 ㎡）12 人、②平原歴史公園（4320 ㎡）９人、ファームパーク９人となっています。

長糸・怡土・雷山の３校区の子どもの回答には、よく遊ぶ場所に川・池・山・林・田んぼ・畑を選ぶ割合が他の６校区と比べて高いという特徴があります。

また、この調査結果からは、「市外の公園」を利用している子どもも多いことがわかりました。全体で第３位に挙がっている「今津運動公園」については、ほとんどの校区から回答者があり、合計 71 人でした。とくに波多江校区では、この公園が１位（高田東公園と同数）になるという結果となりました。また志摩町の公園を回答した子どもも合計 11 人いました。

アンケート調査票のなかで、「どんなところで遊ぶことが多いですか」という質問に対する公園名の記述欄が２ヵ所分しかなかったにもかかわらず、市外の公園名がこれほど高い割合で出てくるとは意外な結果でした。加えて、休日に家族で行く場所についての質問も行ったなら、更に多くの市外の公園名が挙がると思われます。

※参考　表 B：前原市内の面積の広い公園
　　表 C：子どもが遊んでいると答えた公園（校区別）

・子どもは自宅の近くにある　やりたいことをして遊べる場所を選んで遊んでいる
・近くにない場合には学校を利用する割合が高くなる
・遠くの公園を自分の遊び場として認識することもある

表 B　前原市内の面積の広い公園　上位 20 ヶ所

順位	公園名	面積（㎡）	校区
1	笹山	77,507	前原南
2	前原岸壁	36,532	怡土
3	丸田池	34,875	前原
4	日向峠さくらの里	29,439	怡土
5	宮地岳自然	21,894	加布里
6	加布里	20,341	加布里
7	瑞梅寺ダム下	13,728	怡土
8	前原中央	10,867	前原
9	長糸中央	8,686	長糸
10	南風北	5,410	南風
11	みず咲	4,715	南風
12	荻浦はな咲	4,600	南風
13	南風中央	4,577	南風
14	平原歴史	4,320	怡土
15	釜塚	3,780	加布里
16	波多江東	3,431	波多江
17	神在	3,404	加布里
18	丸田	3,302	前原
19	南風東	2,500	南風
20	多久	2,099	南風

表 C　子どもが遊んでいると答えた公園（校区別）※3 名未満省略

校区	公園名	面積（㎡）	人数（人）
加布里	浜ノ園	2043	20
	神在第１２	896	18
	神在	3404	3
南風	南風中央	4577	108
	荻浦はな咲	4600	73
	ゆめ咲	1200	60
	みず咲	4715	48
	南風西	2000	39
	南風北	5410	29
	南風東	2500	25
	ほし咲	1400	22
東風	潤	1779	59
	浦志	1911	35
	潤南	1787	17
	あごら		7
	志登	343	6
	丸山公園	638	3
前原南	篠原	1642	34
	笹山	77507	29
	桃山	519	13

校区	公園名	面積（㎡）	人数（人）
怡土	曽根中央	1892	12
	平原歴史	4320	10
	ファームパーク		10
	大門	996	8
	神社（三雲）	196	5
	曽根第四	419	3
前原	丸田	3302	32
	丸田池	34875	27
	浦志南		3
	みどりの広場		3
波多江	高田東	1587	17
	池田公民館	119	12
	高田第１	329	6
雷山	さくら公園		5
市外	今津運動公園		71
	志摩の公園		10
	小戸		7
	千里		4

１章のまとめ

本章の考察から、保護者世代が家のまわりや自然の中でよく遊んでいたのに比べて、いまの小学生は家の中で遊ぶ割合が倍増するなど、室内が遊び場の中心になっていることがわかりました。

また市街地域では、自宅近辺に遊び場が少ないことがわかりました。子どもたちがやりたいこと（ボール遊びや思いきり体を動かすなど）ができる広い場所や道路、空き地があまりないからではないでしょうか。こういった実態を踏まえると、これらの地域では、学校（校庭）の重要性が高いといえます。

以上の考察から、前原市は、田・畑・山・川など自然が多くあるまちですが、子どもたちは、これらをあまり利用して遊んでいないということがわかりました。

提　言

このたび本報告書をまとめるにあたり、わたしたちが実施してきた「遊び・遊び場調査」をふまえ、現在の前原市の子どもたちがおかれている遊びと遊び場の状況について、多角的に考察してきました。それらの考察をもとに、これからの前原市に求められる子どもの遊び環境について提言いたします。

わたしたちの「提言」は、具体的に図に表しました（61 頁参照）。提言の図は、次の５点をポイントとしています。

○わたしたちは、前原の子どもたちの現在と未来にとって、子どもが遊ぶ環境は重要であると考えます。

○わたしたちが思い描く「願い」の実現にむけて、今回の調査で捉えた遊び場の「現状」に対し、３つの柱をたてています。

○それぞれの柱に立脚し、「提言」を述べています。

○それらの提言を具体化する方法を、「具体策」として提案しています。

○最後に、具体策の実践によって現れると考える「期待される効果」について述べています。

さらに「提言」を踏まえて、わたしたちは「未来の前原の遊び環境」をイメージとして図案化しました。それは、提言をもとに実践される一つひとつの事柄によって、前原の子どもたちとそれを取り巻く市民全体にもたらされる、明るい未来のイメージを共有するためです。

わたしたちは、このような未来の前原の姿を目指して提言し、また今後もその実現に向かって取り組んでいきたいと願っています。

わたしたちの願い

＊子どもたちが、いきいきと遊べる環境で育つこと
＊前原で遊んだ子どもたちが、“大好きなふるさと”を支える大人になること
＊前原が、さまざまな世代の人々にとって暮らしやすく、やすらぎがあるまちになること

調査より

《子どもを取り巻く環境》

・車社会による事故の危険性が高まる

・不審者に対する不安が強まる

・自然の中は人目がなく子どもだけでは心配

・2間（時間・仲間）の減少

・空間が有効に活用されていない

《保護者の想い》

「子どもの遊び環境満足度」
わずか24%！！

遊び場に対する閉塞感が充満している。

子どもを取り巻く環境に対し「仕方ない」というあきらめや「せめて身の安全は確保してやりたい」という責任感が、子どもの行動範囲を狭め、行動意欲を抑えることにもつながっている。

子どもの身近な場所に遊べる空間を増やすために

現状

○子どもの生活圏に遊べる空間が少ない
○子どもの遊び場に選択肢がない

必須最重要課題
今のままでは、自宅と学校でしか遊び経験のない子どもが激増する恐れが！

提言

○遊べる空間の具体的調査・研究

○遊べる空間の掘り起こし

○公園を利用した市民向け事業の開催

○公園の整備

具体策

○遊具や周辺環境の安全面・利用度・改善点などの調査・研究
○地域で遊べる空間を考える機会をつくる（行政区、PTA、子ども会他）
○施設・田畑・空き地・公民館などの活用
○子育て教室・巡回プレーパーク・生涯学習講座などの開催
○日陰やベンチを増やす

期待される効果

○安全な遊び場が増える
○市民が子どもの遊び空間に目を向ける
○過ごしやすさが向上し、大人の利用者も増える
→大人による見守りの目が増える

各校区に運動広場を確保するために

現状

○思いきり体を動かし遊べる場所がない
○「学校でしか遊べない」との声が多い

緊急課題
イライラやむかつきの低減や体力向上のためにも早急に何らかの対策を！

提言

○小学校校庭を「ボール遊びができる遊び場」として開放

○学校以外の場所にも「ボール遊びができる遊び場」を確保（300㎡以上が望ましい）

具体策

○必要度が高い地域から場の確保を実験的に行う
→臨時利用・部分利用・定期利用などに移行
○住民から土地提供を募る
→条件整備・試行設置を経て、期間限定広場・常設広場などに活用

期待される効果

○思いきり体を動かすことができ、精神的に安定する
○体力が向上する
○保護者が安心して外遊びをすすめられる

子どものやりたいことが実現できる場所をつくるために

現状

○さまざまな遊び体験ができる場所がない

長期的重要課題
じっくりと持続的な取り組みを！

提言

○校区に一つ、プレーパークの常設化・内容充実

○住民と行政協働による運営の確立

具体策

○プレーリーダーの養成・常駐
○自然の残っているところをプレーパークとして活用
○資材小屋の設置
○前原らしい常設プレーパークに向けて事例研究・情報収集

期待される効果

○さまざまな体験ができ、創造性や主体性が向上する
○チャレンジすることで、自分の限界を知ったり、状況を判断する力がつく
○いろいろな人との関わりが生まれコミュニケーション力がつく
○住民同士のつながりが深まる

糸島の豊かな自然を活用した遊び場が あちらこちらにできました

冬は田んぼも遊び場に・・・

凧揚げ、ボール遊び、穴掘りなどして子どもたちが汗をかいて遊んでいます。地域と行政との協働により実現しました。

夏は川も遊び場に・・・

川辺の木陰や橋の下など、大人の見守りの中、いきいきと水遊びする子どもの姿があります。

公園ではたくさんの子どもが遊び、大人にも居心地よい場所になりました

・公園に日陰やベンチが増え、子どもの見守りも楽になり、憩いの場としての大人の利用も増えました。
・乳幼児向け子育て教室や巡回プレーパークが開かれています。
・リハビリや健康づくりを目的に訪れる大人もいます
・障がいのある子どもや大人に使いやすい公園もあります。
・泥遊びや水遊びができる公園もあります。

地域にも 子どもの居場所があります

・大人の見守りのある地域の遊び場を、安らげる自分の居場所と感じる子どもたちがいます。中高生の居場所にもなりました

地域に 多世代交流の場も増えました

・中高生が乳幼児に優しく声を掛ける姿がみられます。
・高齢者が子どもたちの遊ぶ様子を見て過ごす姿がみられます。

校庭では 放課後や休日にも 子どもたちが元気に遊んでいます

多くの保護者の願いである「安心できる遊び場」が校庭の開放でひとつ実現しました。

公民館が 子どもの創造的な遊びの場となっています

・フリースペースができ、熱中して遊ぶ子どもがいます。
・地域の大人からさまざまなことを学ぶ機会が増えました。

まちのあちこちに 遊べる空間があります

・空き地や道など子どもの身近な場所が遊べるようになり、子どもたちの姿がまちにあふれるようになりました。

交通事故の危険が減り 子どもも大人も安心して歩けるまちになりました

・学校や公園のまわりの一部の道路が午後3〜6時まで住民以外の車両進入が制限されるようになりました。
・住宅地の中の道路に凹凸がつき、速度制限がなされています。

乳幼児保護者の育児不安が軽減されました

・乳幼児を連れた保護者が子どもを外に連れて行く機会が増え、ひとりぼっちの子育てが減りました。
・身近な遊び場に子どもが増え、保護者も地域の大人と一緒に遊びを見守ることができるようになりました。
・乳幼児安心してのびのびと遊べる場所が増え、保護者の心理的負担が軽くなりました。

おわりに

「遊び」こそ、一人ひとりの子どもの全面的な発達を支え、未来の社会をよりよくするように導くものです。なぜなら、遊びは子どもの創造力を刺激し、情緒や認識力をたかめ、体力をつけるものだからです。子どもの社会性を育て、環境への理解を深めるのに、遊びは不可欠です。

これはIPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）が、その理念として掲げていることばです。

本調査は、このように子どもにとって重要であるといわれる「遊び」が、前原市においてどのような現状にあるのかを明らかにするために、２つの方法によって実施しました。

まずアンケート調査においては、市内の小学校 9 校の全児童とその保護者を対象として行い、多くの回答を得ることができました。
約３千部の膨大なデータの入力には、前原SOHOネットワークをはじめ、33名の方々がボランティアとして関わって下さいました。

実態調査においては、公園や遊び場に赴いての調査記録やインタビューを行う調査員として、34名の方々がボランティアとしてご協力下さいました。

本報告書は、ご協力いただいた一人ひとりの力の結集によってまとめることができました。この場を借りて、ご協力くださった皆様に、厚くお礼申し上げます。

また、本報告書では前原市の遊びの現状を明らかにするとともに、前原市だからこそまだ残されている可能性も見つけることもできました。未来の前原を考える一助となればと願っています。

データ入力および実態調査にご協力いただいた方々　（敬称略）

特別協力　前原 SOHO ネットワーク

協力団体　前原市子育てネットワーク うぃず
あかちゃんサロン あっぷっぷ
いないいないばあ
子育て交流サロン かふりん子
子育て支援グループ 愛 can
子育てほっとステーション みんなの広場
自主保育 おひさま遊ぼう会
スマイルキッズクラブ
つついまち子育て応援団 チャオ
前原ファミリーサポート ゆりかごの会

協力者

有馬幸子	石井優実	石田あゆみ
池田みちよ	石濱真紀子	井島信枝
市川美智子	伊東山裕子	今泉清美
今岡陽子	今村チフミ	今村節子
上原賢司	上原陽子	大神智子
大澤秀春	岡本礼子	金子智子
川崎穂波	木下ゆかり	草垣美紀
熊本裕美子	小林優子	斉藤麻美
坂上寿里	佐藤恵子	塩谷由美
庄島多美子	下村百恵	末武奈津子
田代千歌	高木正尚	田中佐知子
田上智子	谷口眞弓	辻百合
寺田真弓	都甲香織	冨川陽子
鳥越裕美	中村昌子	中山由美乃
濱岡春美	速見久美	服部妙美
兵頭瑞恵	原よし子	廣川聡子
廣川雅子	弘中亜紀子	古田恵依子
本田理恵	馬田恵美	松村道代
松尾由加利	丸目晶子	三苫京子
室内麻子	森友悦子	山木紀子
山口千波	山口佳代	山本幸子
吉村嘉奈子	吉村美恵子	笠千秋
笠ひとみ		

他多数の皆様

報告書編集　まえばるの遊び場ったい！
協　　力　前原市経営企画課
　　前原市子ども課
執　筆　者　堀本　由岐子（まえばるの遊び場ったい！）
　　那須　きよみ（まえばるの遊び場ったい！）
　　河野　尚美　（子育てほっとステーションみんなの広場）
助　　言　山田　裕司　（九州大学大学院人間環境学研究院 助教
　　現・宮崎大学 准教授）

発　行　日　2008 年 5 月 5 日
問い合わせ先　前原市子育て支援センター（愛称：すくすく）
所 在 地　福岡県前原市前原東二丁目 1 番 25 号
電話/FAX　092-321-0464
Ｅメール　sukusuku-maebaru@fork.ocn.ne.jp
URL　http;//www.city.maebaru.fukuoka.jp